

インターカルチャー

INTERCULTURE

NO.105

2006年5月号

MAY



■■ 学校法人 千里国際学園 Senri International School Foundation (SISF) ■■

千里国際学園中等部・高等部 Senri International School (SIS) 併設 大阪インターナショナルスクール Osaka International School (OIS)

〒562-0032 大阪府箕面市小野原西4丁目4番16号 TEL 072-727-5050 FAX 072-727-5055 URL <http://www.senri.ed.jp>

第13期卒業生巣立つ

大学等合格状況

8ヶ国語で宣誓 - 第16回入学式

高等部学年旅行

模擬国連報告

APAC Band / APAC Theatre



2006/4/5 入学式

卒業生たち (Learning for Life その2)

大迫弘和
SIS 校長

私たちの学園SISにとっては全く違和感のないごく普通のことなのですが、もしかしたら日本の一般的な考え方からすると、とても不思議なことなのかもしれません。

去る3月4日(土)に第13回SIS高等部卒業式を終えたのですが、翌週の6日の月曜日にも、既に二日前に卒業証書を手にした彼らの姿がキャンパスにあるのです。なにをしているのでしょうか……。

そう、彼らは卒業式後も3月14日の冬学期の授業終了日まで、冬学期に履修をしている授業に出席していたのです。

「どうしても取りたくて取っているのですから。」

何の術(てら)もなく彼らはそう言います。

そもそも12生の冬学期は所謂「自由登校」になっています。これは多くの日本の学校で行われているものと同じです(SISには「senior privilege シニア・プリビレッジ」というシステムもあり、これはおそらく他の日本の学校にはないだろうものです。12年生の特権＝履修している授業がなければ3:30前でも所定の届けを出した上、下校してもよいというOISに倣(なら)ったシステムです。11年生までは絶対3:30まで学校にいないてはなりません)。

卒業後の進路の準備のため(主に大学の受験の準備のため)の自由登校＝学校に来ることを基本的には求められない、というこの期間、SISの12年生たちは、確かに朝のHRはなくなり登校の形態は変わりますが、それでも「自分がどうしても取りたい授業」を取り続けるのです。「推薦型」の入試によって冬休み前には進学先が決定している生徒の比率は年々じわじわと高くなっていますが、もう進学先が決定している12年生たちでも「どうしても取りたい授業」「取っておきたい授業」を最後の最後まで取り続けるのです。

この事実はSISという学校で行われている教育が一体どのようなことを目標としているか、SISの生徒たちはどのような姿勢で「学ぶ」ということを考えているか、

ととてもよく表しています。

少し前に校長室を訪ねてくれた数年前の卒業生がこのように言いました。

「SISにいた時は、とにかく取りたい授業がたくさんあって、ランチタイムも授業を取ったりしていました。それでも、どうしても取れなかった授業があって、今も心残りなんです……。校長先生、もう、取ることも出来ませんか?」

勿論最後の一言はユーモアであったはずですが、一瞬、本気かな、と思わず思ってしまうほどの真剣さを感じてしまいました。

また別の卒業生に最近の様子を尋ねると、

「色々な活動の幅ということ言うとSISの時ほどの広がりや今のところもていないのでどうしたらいいかな、ってちょっと考え中なんですけど、授業は取っても面白いんです。もっとも色々なことを知りたい、勉強したいって気持ちが強くなって、その意味ではすごく充実しています。」

SISでの学び。Learning for life. 人生のための学び。

それは大学に合格したらおしまいになってしまうような勉強とは根本的に異なるものです。それは自らの「生」に結びついていく学びです。

SISの生徒たちの学び方は、ですから、漱石的に言うなら、正に「内発的」に、自ら進んで学ぶという形になるのです。

多くの進学校では高校1年生だけで履修する生徒がほとんどいなくなってしまう芸術系の教科(音楽・美術・書道)を、SISの生徒の多くは、誰に指示されるわけではなく、自らの意志で、12年生の最後まで取り続けます。すばらしい学校文化だと誇りに思います。また生活科学科も11・12年生に「必修」を置き、生活者としての「自立」を目指す授業を行っています。

1991年の開校の年、私は7年1組の担任を務めさせていただきました。その時のクラスの生徒の一人がこの春、仕事のために東京に向かうことになりました。彼の門出を祝福するため、久しぶりに懐かしい顔が集まりました。東京に向かう彼は、大学卒業後一旦勤務した企

業を辞め、専門学校に進みました。靴の製作の技術を学ぶ専門学校です。その学校を卒業し、彼は東京で、体の不自由な方たちのための特別な靴の製作者の仕事を行います。お祝いに駆けつけた友人の一人は児童保護施設の職員として虐待などで苦しむ子どもたちのお世話をしながら、夜は小学校の教員免許を取るために大学に通っていました。他の一人は、自分自身が大学時代に大きな怪我をし、それをきっかけに知ったPT(Physical Therapistの略だそうです。理学療法士という仕事です)としての道をこの春から歩みだします。

そのような彼らの元気で忙しそう毎日の話を聞きながら、7年生の時のあどけなかつた彼らの様々な出来事を懐かしく思い出しました。あの時12歳で、中には半ズボンで毎日登校していた子もあつた、そんな彼らも今年28歳、少しゆつくり気味かもしれませんが確かで、そして人としての誇りを持った人生選択を、SISの卒業生らしくしているように思いました。

私はそんなSISの生徒たち、卒業生たちのことを心から誇りに思っています。



編集部よりお詫びと訂正

前号の大迫校長の文中で「Learning for Lifeという表現を国際バカロレア機構が使っていますが」の部分は校正上のミスで、正しくは「Education for Lifeという表現を国際バカロレア機構が使っていますが」です。お詫びして訂正いたします。なお学園HP上では既に訂正しています。

第13期卒業生巣立つ

3月4日（土）千里国際学園体育館にて、高等部第13回卒業式が挙行されました。多くの保護者、在校生、教職員が12年生の旅立ちを祝福しました。卒業生は、スライドとBGMとともに、スポットライトを浴びながら赤いじゅうたんから登壇し、ひとりひとり、校長先生から卒業証書を受け取りました。新たな一歩を踏み出す卒業生、その輝かしい未来に幸あれ！



大学等合格状況

進路情報室より

見島直子

国語科

今年の春は、3月後半に寒い日が続き、桜の開花が遅れました。特に、北千里付近の桜は例年に比べずいぶん遅い開花で、かたいつぼみを今日か明日かとか気をもみながら眺める日が続きました。しかしながら、桜は「その時」が来ればちゃんと咲くのですね。

桜の木が、毎年春になると同じように花をつけ、私たちの目を楽しませてくれるように、春はまた、高校3年生が卒業を迎え新たな環境へと巣立っていく姿を見せてくれる季節でもあります。去年の桜と今年の桜が同じ花ではないように、去年の卒業生と今年の卒業生も同じではありません。更にその一人ひとりが、それぞれ違った道のりを経てそれぞれの花を咲かせるのです。(今年は花をつけるのをやめて来年に延期した人も含めて。それもよし。)

ここに掲載した05年度大学等合格状況一覧は、ひとつひとつの花の具体性を捨象した遠景の桜です。在校生の皆さんには、その景色を愛でるだけでなく、「その時」に自分だけの花を咲かせるため、これからの学園生活において自分を大切に磨き続けてほしいと思います。

高校1年生、2年生は、学校生活を充実させる中で、自分の適性を見いだすと同時に基礎学力をつけていくことが大切です。3年生は「どうとう受験生になってしまった」という意識が強いと思いますが、その意識に足を取られて気持ちばかりが空回りしたり、いたずらに不安に駆られたりすることなく、腰を据えて自分のすべきことをしていくことが大切です。進路選択(学部選択・学校選択)に熱心になるのは(無論)もちろん大切なことですが、また同時に、あれこれと迷い過ぎるのも実は考えものです。何でもそうですが、物事は正面から向き合い真っ向勝負をしないことにはいつまでたっても奥にあるおもしろさにたどり着くことは出来ません。学部を選択する時点で本当にその分野のおもしろさがわかっているなんてことは不可能なのです。ですから、

2005年度卒業生徒数82名・過年度生9名(合格者数は延べ人数)

*掲載順序は北から南への地域順 *2006年4月11日現在判明分

| 学校名 | 合格者数 | | 学校名 | 合格者数 | |
|--------------------------|------|----|----------------------------|------|----|
| | 現役 | 卒業 | | 現役 | 卒業 |
| <国公立大学> | | | | | |
| 北海道大学 | 1 | 1 | 京都精華大学 | 1 | |
| 筑波大学 | 3 | | 京都造形芸術大学 | 1 | |
| 東京外国語大学 | 1 | | 関西大学 | 4 | 1 |
| 東京学芸大学 | 1 | | 聖和大学 | 1 | |
| 京都市立芸術大学 | | 1 | 近畿大学 | | 1 |
| 京都工芸繊維大学 | | 1 | 大阪芸術大学 | 1 | |
| 大阪大学 | 1 | | 東大阪大学 | 1 | |
| 神戸大学 | | 2 | 関西学院大学 | 15 | |
| 鳥取大学 | | 2 | 宝塚造形芸術大学 | 1 | |
| 香川大学 | 1 | | 関西医科大学 | | 1 |
| 広島大学 | 1 | | 流通大学 | 2 | |
| <私立大学 短期大学> | | | | | |
| 慶応義塾大学 | 4 | | 姫路獨協大学 | 1 | |
| 上智大学 | 4 | 1 | 立命館アジア太平洋大学 | 1 | |
| 早稲田大学 | 1 | 1 | <専門学校> | | |
| 青山学院大学 | 2 | | 日本外国語専門学校 | 1 | |
| 聖路加看護大学 | 1 | | アジア農村指導者養成専門学校 | 1 | |
| 日本大学 | | 1 | バンタンデザイン研究所 | 1 | |
| 中央大学 | 1 | | 高津理容美容専門学校 | 1 | |
| 法政大学 | 1 | | 大阪ビジュアルアーツ専門学校 | 1 | |
| 成城大学 | 1 | | 神戸製菓専門学校 | 1 | |
| 立教大学 | 1 | | <海外の大学> | | |
| 北里大学 | | 2 | Temple Univ. (US) | 2 | |
| 麻布大学 | | 1 | Univ. of Hawai(US) | 1 | |
| 金沢工業大学 | | 1 | Univ. of Tronto(CANADA) | 1 | |
| 立命館大学 | 11 | | Univ. of Warwick(UK) | 1 | |
| 同志社大学 | 4 | 1 | 英国王立音楽院Trinity College(UK) | 1 | |
| 京都外国語大学 | 5 | | ECU(AUSTRALIA) | 1 | |

学部選択に自分なりに迷いつくしたと思えた時点で、とりあえずその方向で準備を始めましょう。迷う時間が余りに長くなりすぎると、学力をつけるという実働部分がおろそかになったり、奥にあるおもしろさに近づく時間を失ってしまったりする可能性もあるのであります。

さて、自分の力(学力)がどこまで伸びるのか、これもまた真っ向勝負真剣勝負してみなければわからないものです。

騎手の武豊が言っています。「自分のベストは自分にしか出せない」。

最後になってしまいましたが、進路情報室の存在もお忘れなく。私たちにいったい何が出来るのかと聞いて、決して多くはないと思いますが、それでもあなた

たち一人ひとりと正面から真っ向勝負でぶつかる気持ちは持っていますよ。来室をお待ちしています。



私の受験体験記

南出希実
第13期卒業生
香川大学医学部



正直に書くと、私は初めから医学部志望ではありませんでした。高校生物の授業で遺伝子の魅力にはまった私は、生物学科に行きたいと願っていたのです。将来は世界中を飛びまわり、遺伝病の解明をして人々を助ける遺伝子学者。これが私の夢でした。ところが、新聞で読む学者世界は厳しいものだったのです。生物学科に進めても、将来それを仕事に出来るのはほんの一部。結局は大学院に進んだ後は、一般就職が大半となる。将来も確実に遺伝子の研究を続け、それを人々に還元する方法はないか。探っていく中で、たどり着いたのが医学の道でした。

医学部を目指す事が決まってから、私はすぐに国立の推薦探しを始め、香川大学を見つけ出しました。地方大学でありながら、特色ある教育を行っており、国際化を見据えて留学制度が整っている事などが魅力でした。

推薦は一般と違い準備時間がかかります。まずは志願書作り。添削と書き直しの日々が1ヶ月ほど続き、その間に先生

と話し合った回数は数知れず。面接に向けた大学情報集めも必要で、これが意外と骨の折れる仕事であったりするのです。

香川大学の推薦においては、まず年内に小論と面接が行われ、年始のセンター試験の結果を踏まえて可否が出されます。こうして迎えた試験日。小論文は2つあり、まずは英文、2つ目が和文でした。英文は遺伝子治療やクローンについてだけでなく、医学の思想などにも触れた難解なものであり、和文は人口爆発についての医療の役割という題材でした。昼食をはさんで、グループ面接と個人面接があったのですが、このグループ面接でのディスカッションで私は衝撃を受けました。周りの子たちのディスカッション力が余りにも低かったのです。新しい話題を提供したり、深く掘り下げて話す事が出来ない。だからSISのみなさん、ぜひ自信を持ってください。この学校で行われているディスカッションレベルは誇れるものです。

一番精神的に辛かった時期をあげるとすると、やはりこの試験からセンター試験までの約2ヶ月間です。期間が長くあくので、モチベーションを保ち続けるのが大変であるという事だけではなく、周りの子たちが指定校推薦やAO推薦で決まっていくというのは少し辛いものです。無論、友達が合格するのはとても嬉しい

事ではありますが、まだ決まっていなく、合格する確証も持てない自分の事を考えると不安になったりしました。こんな時に心の支えとなってくれるのが、数少ない国立志望の友達です。私自身も電話で、勉強の愚痴をこぼしあったり、将来の不安を語りあったりしました。

後輩である皆さんに知っておいてほしいのですが、受験期に入ると、多かれ少なかれ辛い事や、不安に思う事があるでしょう。そんな時に楽な道が示されると、心揺れるものです。私も追い詰められて、学部変更まで考えた事がありました。でも、出来るものなら諦めないで下さい。受験はひと時のものかもしれませんが、それは10年後の自分をも左右する大きな決断なのです。また、SISは文系、特に国際関係の大学に強いというイメージがありますが、決して理系が不利という事はありません。私がこうして医学部に合格出来たのも、6年間のSIS生活で得たもの抜きにしては、在り得なかったと思います。結果的に、無事に合格する事が出来たので、このように体験談を書く事が出来たのですが、少しでも参考になったでしょうか？

最後になりましたが、私の受験を支えて下さった先生方、ずっと応援してくれた友達、そして私の信念を信じ続けてくれた家族に心から感謝します。

学校説明会のお知らせ

入学センター

2006年度学校説明会を下記のとおり開催します。お知り合いで本校に興味をお持ちの方がいらっしゃいましたらお知らせください。

■第1回学校説明会 5月17日(水曜日) 13:30～

内容：学園の教育全般について・施設案内・個別相談

■第2回学校説明会 6月17日(土曜日) 13:30～

内容：学園の教育全般について・施設案内・個別相談

※30分前より受付開始。いずれも約2時間の予定。個別相談は希望者のみ。予約不要。上履き不要。過去入学試験問題集(一般生徒用)販売。

※説明会当日の個別相談は、人数と時間の関係で1人当たり15分程度になります。個別のご相談は随時受け付けておりますので、ご希望の方は入学センター(072-727-5070)にお申し出下さい。

8ヶ国語で宣誓

第16回入学式

中等部・高等部第16回入学式が、4月5日（水）に本学園の体育館で挙行されました。今年は残念ながら、好天にも桜にも恵まれませんでした。音楽科森路佳先生の指揮による華やかなバンド演奏と大きな拍手に包まれて、54名の中等部入学生と、87名の高等部入学生（内部進学者61名含む）が、入場しました。

小林公平理事長・学園長、福田國彌副理事長、OISキャフィン校長から心温まる祝辞をいただきました。大迫校長のお話とともに、しっかりと新入生、編入生の皆さんの心に刻まれたことと思います。

毎年恒例の生徒宣誓は、8ヶ国語で行われました。山田恵美子さん（7年 日本語）、王姿雅さん（7年 中国語）、村川升麻さん（7年 英語）、浦上直さん（7年 フランス語）、尹鐘大さん（7年 韓国朝鮮語）、中島悠羅さん（7年 ドイツ語）、サンボードルジ・オユンビリグさん（10年 モンゴル語）、ロベス・アメスクア・ユリッチさん（11年 スペイン語）の8名が、堂々とそれぞれの言語で、世界人権宣言の精神に基づいた生徒宣誓を行いました。

最後に中等部生徒会、高等部生徒会から、SISらしいとても楽しくユニークな歓迎の言葉があり、和やかな入学式となりました。



春学期入学帰国生等内訳

入学センター

<国別>

アメリカ 14

中国 4

マレーシア 2

ベトナム 2

インドネシア 2

イギリス 2

韓国 1

モンゴル 1

メキシコ 1

フランス 1

カナダ 1

国内外国人学校 6

国内インターナショナルスクール 2

計 39名

<学年別>

7年生 13

8年生 5

9年生 2

10年生 13

11年生 4

12年生 2

計 39名

シーサーにひと目ボレ

高等部学年旅行

福井麻友子

旅行委員長、高等部3年

あの5日間の11年学年旅行を一言で言い表すとすれば「最高！」の一語です。私にとっては今までで1番の旅行になったし、他の11年の生徒にとっても、心に残る思い出を作ることができたのではないかと思います。

私たち11年生(現12年生)は旅行委員会を中心として1年間、学年旅行についていろいろと話し合いをしました。最初に、何をしに学年旅行に行くのか?という意識をはっきりさせるため<異文化・食文化・癒しの旅>というテーマを決めました。そして皆の意気が入る場所決めでは、候補地として13地域が選ばれましたが、健康や安全面の問題が目の前に現れ、有力候補だった地域をいくつか削り更に2回投票をした結果、沖縄に行くことに決まりました。また私たちは沖縄本島の周りがある島にも行ってみようという事になり、石垣島、竹富島、西表島にも行くことになりました。そして日程が少しずつ決まっていき、『いよいよ学年旅行も近づいてきたなあ!』と実感してきました。

3月17日、学年旅行の初日の朝、大迫先生に見送られ82年の生徒と5年の学年の先生方、教頭先生、弥永先生、阪急交通社の宍井さん、中西さんと一緒に那覇空港へと飛び、那覇空港から石垣島への便に乗り換えホテルに向かいました。移動中のバスの中では「うわっ!暑っ!」とか「牛がいるー!」とか「小学校かわいいー!」など、些細なことで盛り上がっていました。夕方にはホテルに到着して夕食までは自由行動だったので、海を見に行ったり、散歩をしたり、frisbeeをしたり、ホテルでくつろいだりと本当に自由に過ごしました。食後も各自で過ごし、初日はゆったりしたスケジュールでした。2日目は西表島へ行き、クルーズ・トレッキング中心の「自然を感じるコース」、クルーズ・観光・西表野生生物保護センター・温泉に行く「西表島について知るコース」、そして一日中マングローブを見ながらカヌーをする「カヌーの達人になるコース」の3つの

コースに分かれて過ごしました。各コースで自分がしたい事ができた1日だったと思います。

夕方には竹富島へ行き、現地の人と夕食を食べながら交流をしました。エイサーを教えてください、沖縄の唄を歌っていただきました。現地の人は、とても気さくで、面白い方ばかりで交流会の時間はあっという間に過ぎてしまい、真暗の中民宿に向かいました。夜は静かになると聞いてはいたけれど、本当に静かでした。なにより私が一番驚いたのは、洗面所と外との間に壁やドアがなく、すごくオープンだった事です。

3日目は平和学習の日で、本島に戻って資料館や壕に入り体験者の方のお話を聞きました。壕というのは自然にできた洞窟に戦時中の人々が身を隠した所です。とても狭く暗くて、何日もあそこにぎゅうぎゅう詰めになって身を隠していたなんて信じられません。平和学習の後は、恩納村にあるホテルに向かいました。予想していたよりも、リッチなホテルで室内プールや目の前にビーチもあり自由時間にヒマという文字はありませんでした。4日目はタクシープランといって、クジで決めた6~9人のメンバーと一緒に自分たちで決めたコースをタクシーのおじちゃんに連れて行ってもらうというプランでした。ランダムにメンバーを決めたこともあって盛り上がるかどうか、楽しい思い出が作れるか不安でしたが皆の感想を聞いていると、とても楽しかったようなのでホッとしました。

そして最後の夕食はパーティーをしながら皆で食べました。かなり練習した事が分かるパフォーマンスばかりで、並のTV番組以上に面白かったし、感動しました。パーティーはビーチで感動的な花火をして締めくくる…はずでしたが、風があまりにも強くて感動どころか、火をつけるのに必死でした。旅行委員と先生で必死に手持ちや打ち上げ花火に火をつけ、叫びながらもなんとか終わりました。強風の中花火をしたこと、最後に皆で円



になって「涙そうそう」を歌ったことを、私は忘れません。最終日、朝から首里城を見学し、パインナップルハウスで無料のパインナップルやお菓子を食べてくれた後、那覇空港から神戸空港へ戻ってきました。沖縄に転校していた陳冠澄に会えたことも大きな喜びでした。

あっという間でした。最初は『沖縄で5日間も何するんだろ?』と旅行委員ながらも思っていたけれど、あの5日間はとても充実していて楽しいことばかりでした。でも、その5日間を最高!にするためには大勢の人が関わっていた事を、私は特に旅行中に気付きました。まず、各ホテル、民宿の方々。特に最後のホテルのパーティーの時はお世話になりました。大迫先生、平尾先生、弥永先生、旅行が成功するように手助けしてくださってありがとうございました。いつも壁にぶち当たった時や私たちが文句を言いながらも、根気よく支えて下さった学年の先生方、いろいろ迷惑をかけてすみませんでした。また宍井さんにはいろんな注文ばかり言ったのにも関わらず、希望通りのプランを立てていただいて感謝の気持ちでいっぱいです。そしてどんな時も楽しんでくれた11年の皆、最高のパフォーマンスをしてくれた皆、いろいろ迷惑かけたけど、最後まで楽しんでくれてありがとう。

最後に一緒に1年間頑張って企画してきた11人の旅行委員。夏子、脩太、紗莉、康介、美樹、敬、可奈、大輔、美鈴、文、浩平。影でいっぱいサポートしてくれて、本当に本当にありがとう。週に1、2回のミーティングも、旅行中の日替わりリーダーや点呼、夜のミーティングも大変だったと思うけど良い結果がだせて良かったね!またいつか、あの綺麗な海を皆で見に行けたらいいねっ☆

2006 Marist Model United Nations

Mark Avery

SIS MUN Coordinator

139 delegates from six schools across Japan attended this year's Marist MUN. Our delegation of 13 became very involved in the meeting and enjoyed the experience. They debated six topics over three days and resolved an emergency crisis. Each year, as more pressing global issues emerge, the topics become more challenging leading to the quality of the debate being very high. In effect, the students are searching for solutions to problems world leaders are unable to solve. I would like to thank Istvan Viczian, Marie Asano and Sandra Gathmann from OIS for conducting the weekly mock sessions. I would also like to congratulate Istvan on being presented with both the President's Award and the General Assembly Award. Even though the delegates from SIS were all doing MUN for the first time, two students from our class, Midori Hase and Iona Sugihara, were able to receive outstanding participation awards. Iona also served as chair of the European bloc meeting on the first day. Akiko Matsumoto and Tomoka Aiyama acted as bloc secretaries. Everyone represented their country effectively in the meeting. Now, please enjoy some comments from the students.

What is the UN?, by Sho Sugihara (FRANCE)

As the UN was created to find concrete resolutions to global issues, I believe that the MUN had further functions. This year, 139 delegates met at MBIS to debate intensively over a three day period. Not only did we find effective solutions to the issues but many of us also perceived valuable lessons of our own cultures. As an individual and as a delegate, I would often have internally conflicting opinions on the topics. The MUN taught me to value both of these opposing views and also showed me that the UN and the MUN are both nothing more than a global composition of, and a forum for such diverse values.

国連は世界中で起こっている問題を解決するために設立されたが、模擬国連はそれに加えてさらに働きがあるのではないかと私は思う。今年は139カ国からの模擬国連議員がMBISに集まった。ここで様々な難問に対する解決案を創造しただけでなく、返って自分達の文化について学んだ気がする。一人の人間として、または一人の議員として、自分自身の中で意見の食い違いがあった。模擬国連が終わって、相対する見解の両側の意見に価値をおける人になれた気がする。国連も模擬国連も、こういった時折には相反する多種多様な意見の混ざった世界的な組織なのではないかと思う。



The Role of a Delegate, by Iona Sugihara (CROATIA)

During the course of 12 weeks, I have managed to accumulate a sense of passion and attachment towards my country, Croatia. As a delegate, the most challenging part is putting aside your ideals, your prejudices, and your home country's (i.e. Japan/U.K.) best interests to think and speak for a nation you've only ever acknowledged as a uniform during a soccer match. Until now I had wondered why two hundred U.N. delegates who probably upheld more or less the same morals, could so easily find anything to disagree about. MUN being a huge reality check. I am now aware of how small-minded this observation was and how

not all countries, let alone individual people, can not always afford to agree on a resolution even if they support it. Compromising your ideals and your country's best interests is not an easy job, but coming out of the Marist MUN with so many new friends shows that underneath the roles we took, we are all friendly people with a genuine interest and concern for a more peaceful world.

クロアチア代表として

国の代表として担う責任は、例え自分のモラルと反していても自分の国にとって有利な立場をとらないといけないということ。その結果が、マリスタの会場で約130人の高校生と火花を散らすことになる。模擬国連のクロアチア代表としての意識を高めた12週間。決して楽といえ

る仕事ではなかったが、自分の持つ理念、偏見をすべて捨てて望んだ最後の三日間で得たものは大きい。

How we Prepared for the Meeting, by Kosuke Maeda (BELARUS)

The vast amount of preparation we had to go through to be ready for the meeting turned out to be well worth it. We completed 35 article responses, a resolution paper, right to statement, position paper, position speech and the list goes on. We also had mock meetings once every week for these couple of months. At first the idea of preparing for twelve weeks for a meeting that lasts only 3 days seemed ridiculous but in the end it was worth every minute of work.

The Darfur Conflict, by Yuka Matsubara (KENYA)

Thousands of Sudanese continue to become displaced in other parts of the country and to neighboring nations because of Darfur's raging conflict. Rebel armies started taking violent action against the government in 2003. Human rights have been violated in Darfur ever since, causing a humanitarian crisis in the region. At the MUN, delegates debated whether the support of the United Nations' peacekeepers was appropriate in the tense zone. The delegate of Sudan insisted on taking care of the crisis without such help, which is what the Sudanese government is stating now. As global citizens, we must resolve this issue through collaboration and peaceful means.

現在、何千人ものスーダン人がダルフール州から強制退去を強いられ、隣国などへも追いやられている。2003年、反政府組織の怒りがスーダン政府に暴力で訴えられた。それ以来、州民の人権が侵害され続けている。今回の模擬国連では各国の代表者たちが国連の国際和平監視部隊の派遣についてディベートした。スーダンの代表は国連での実際の議論でも主張している、自国での問題解決を目指した。地球市民として人々は皆、平和的手段を用い協力しあいながら、この残虐行為を阻止する必要性がある。

Avian Influenza, by Tomoka Aiyama (CENTRAL AFRICAN REPUBLIC)

Avian Influenza, known as bird flu, is a disease that is passed on from bird to human, and numerous people have died in parts of Asia, Africa, Europe and the Middle East. The International community is putting efforts into stopping the further spread before it mutates into a form that can be easily passed on from human to human. The debate became heated towards the end, since developed nations were focused on how to prevent a global pandemic, while many developing nations cannot deal with this problem within the country and want the help from the developed nations.

鳥インフルエンザは鳥から人間へと感染するウイルスで、アジア、アフリカ、ヨーロッパ、中東など世界各地で死亡や感染などの被害が確認されている。国々は今以上の感染を防ぐことに力を入れている。ウイルスが人間から人間へ感染することのできるものになる前に、最前線の医療技術で新型のワクチンの開発に必死である。この議題のミーティングでは、世界中での感染の予防の重要性を訴える発展国と、自分たちではどうしようもないと発展国に助けを求める貧しい国々との対立で火花が散った。

The General Assembly, by Midori Hase, the delegate of Jordan

"Delegates, the GA is now convened. We will proceed to roll call attendance. Jordan."
"Present and voting."

One by one we would be called, and from then on, we were no longer students. We became delegates of a certain country, presenting your country's opinions on the debated topics. Intensity fills the air as delegates shoot their placards up in a room filled with 138 other delegates from six different schools. Delegates are passionate about their countries, making the de-



bates extremely effective and sometimes aggressive, with the odd bit of humour adding essence to the atmosphere. After two hours of continuous debate, the session closes and the topic is voted upon.

国際連合総会, 長谷翠、ヨルダン代表

「代表者の皆様、ただいまより総会を開きます。出欠をとります。ヨルダン。」

「出席です、投票します。」

一人一人このように呼ばれ、その瞬間から私達は生徒ではなく、ある国の代表者として、その国の視点からディベートに参加する。緊張感があふれる中、6校から参加している138人の代表者たちと共にプラカードを勢いよくあげる。代表者たちは自分の国に対して情熱的で、全てのディベートは大いに盛り上がり、時には反発的であっても、たまに出るユーモアが雰囲気や和らげてくれる。こうして2時間ディベートをした後、総会は終了し、投票となる。

Mission Impossible, by Natsuko Itami (EGYPT)

So what is the International Criminal Court? It's the first and only permanent court that prosecutes international crimes concerning genocide, crimes against humanity, and war crimes. Although it may sound as if any accused criminal would be eligible for prosecution, it isn't the truth. Countries have to ratify (make nationally valid) the Rome Statute (the document that constitutes the ICC) to be under the jurisdiction of the ICC, but so far only 100 of 191 countries in the United Nations have ratified it (2004). My Middle Eastern block,

ironically, got this topic, and had to come up with a resolution to invite more countries to ratify the document. The problem was who would be willing to ratify it if the submitters of this resolution hadn't? We got attacked by countries saying that they couldn't agree to a resolution that was created by non-ratifying countries, ending with the least votes during the three days. While our block got the most challenging topic, it was a fantastic experience, and I'm certain that all of the Middle Eastern delegates advanced further their abilities to adjust with demanding tasks.

分不相応

国際刑事裁判所 (ICC) とは世界初の、戦争に関連している犯罪を取り扱う裁判所で、現在は国連に参加している 191 カ国のうち 100 カ国ほどが批准している。しかし、国際刑事裁判所とは言え、批准していない国やその国民は ICC では裁かれることが出来ないのが現状。そんな状況を変えるために模擬国連のテーマとして議論することになったのだが、皮肉なことに私の所属した中近東グループが決議案作成を担当することになってしまった。中近東からはわずか 2 カ国しかこの国際刑事裁判所設立規程を批准してなく、そういう状況にいる中近東が提案した決議案が採択される可能性は低く、3 日間のうちで最も賛成票の少ないテーマとして皆の記憶に残った。

一番難しいテーマだった分苦労は絶えなかったが、難題に取り掛かる力がつき、とても充実した 3 日間を過ごすことが出来たので、満足した。何事もチャレンジ精神が大切だと感じた。

The Emergency Crisis, by Misuzu Sakai (SERBIA AND MONTENEGRO)

After all six topics we had prepared for three months had been discussed, an "emergency crisis" occurred—"Truck Bomb Kills 'Hundreds' of Indian Soldiers; India-Pakistan Move to War Footing". 100,000 India/Pakistan reserves were massing along the border so to stop them from shelling each other, the GA created an extemporaneous resolution and debated it. In spite of being suddenly made to face the pre-

dicament, the delegates of two mainly involved nations, India and Pakistan, were calm yet earnest in speaking for their countries. Since none of the participants were told about the topic beforehand, it wouldn't have been possible to debate on it if we hadn't had ourselves been informed of world news. So, why not keep yourself updated with world news too, not only to know what *has* happened but also to infer what *might* happen?

3ヵ月かけて準備した6つのトピックを議論した後に、「トラックに詰まれた爆弾でインド兵多数死亡。インド、パキスタン戦時体制に入る」という『緊急事態』が発生した、という想定が出されました。インドとパキスタンが国境に強大な軍隊を装備したということで、GA は即座に解決策を考え、議論しなければなりません。インドとパキスタンの代表者は、突然窮地に立たされたにも関わらず冷静かつ真剣に議論に参加していました。このトピックは誰もこの時まで知らされておらず、それまでの世界のニュースに耳を傾けていなければ難しいものでした。だからあなたも何が起ったかということを知るだけでなく、何が起こり得るかということを知るために、もっと世界のニュースに気をつけてみませんか？

Security Council Reform, by Chie Asakura (LESOTHO)

"Poverty, corruption, lack of education—in our SIS/OIS community, these are worries that we need never face. You are probably aware of the global conflicts being exposed on the media every day and you may wonder, "Why can't anyone do something about it?" Being the delegate of Lesotho, a tiny African country suffering from an unfortunate number of disasters, it was particularly frustrating to see the United Nations not focusing enough attention on minor countries. Sitting at the top of the United Nations, there is a working group called the Security Council which holds "primary responsibility for the main-



tenance of international peace and security." This Council is made up of representatives from fifteen nations, and its role is to make the final decision to whether or not carry out proposals made by the General Assembly. Along with the birth of the United Nations in 1945, Security Council was formed, mainly to settle the aftermath of WW2, and it still continues to bring solutions to modern issues. So why, despite all the talk and concern, advertisements and funds, do third world issues steadily become worse? Many believe that this lies in the imbalance of power within the Security Council; you see, although the members of this council periodically rotate, the Great Five members maintain permanent seats, and on top of that they wield veto power, the authority to turn down any proposal with their single 'no' vote. To this day, the G5 remain the United States, Russia, France, United Kingdom, and China, who were the winning allies of the WW2. It is only natural to use power to one's advantage, and these five developed nations are ensured an enormous amount of it. However, with the world war long in our past, and considering the changing realities of our world, there are many outcries of its unfairness, and much attention is focused upon bringing about change in Security Council membership and its working methods. Security Council Reformation—in the MUN it was the African region's mission to create a resolution con-

cerning this topic, and it proved to be a challenging one. We had to compile a proposal that would convince the entire General Assembly; in other words, suggest a new Security Council that would allow underdeveloped nations to have a stronger voice within the global community and at the same time not destroy the sovereignty of those nations already in power. In the end, our resolution failed by a close vote, but that doesn't matter. What did matter was what we all learned from the experience; I learned to accept that in an international debate, a universal agreement is often never even close to being possible because of the diversity of each nation's values and the rights that we all proudly hold.

Nuclear Inspections, by Akiko Matsumoto (THAILAND)

Nuclear inspections are vital in securing world peace. This seemingly obvious belief does not exist everywhere. Iran, a nation drawing great suspicion from the world, believes these inspections are a violation of rights. It claims it enriches uranium only to generate electricity. True, every nation does have the right to promote nuclear technology. However, can we really trust Iran's words? Why is it necessary for a nation to block inspections if it's doing nothing wrong? MUN students spent hours considering such questions and still the answer remains unknown. Readers of Interculture, please think about it yourselves as well.

核査察

核査察は世界平和を保障するために必要不可欠なものです。この一見当たり前のような考えは、誰もが持っているものではないのです。最近世界に疑われているイランが言うには、核査察は権利の侵害であるのです。イランのウラン濃縮は発電のためだと断言しています。確かに、どの国も核技術を促進する権利を持っています。しかし、本当にイランの言葉を信じてよいのでしょうか。悪事を働いていないのに、どうして査察を閉鎖する必要があるのでしょ

うか。生徒たちはこういった問いを何時間もかけて考えてきましたが、未だにはっきりとした答えはありません。「インターカルチャー」の読者の方々も、どうかこの件に関して一度じっくり考えてみてください。

Benefits of Doing the Course, by Emily Koyama (NEPAL)

Firstly, from taking this class, the muscles on my arm have doubled from the continuous laptop relay within the class. Apart from that, this course has benefited me not only as a student, but also as an individual. My ears are now always on full alert, trying to take in news from around the world. I have gained respect and understanding for other countries, and am now fully aware of the existence of different cultures. MUN has taught me to understand each conflict, each dispute in depth, but mostly, has taught me to not to be biased.

Benefits of Taking the MUN — MUNを通して得たもの, by Emmy Reis (JAMAICA)

Through the months of research and discussion, I came to realize how I had been neglecting the fact that everywhere around the globe, arrogance and corruption takes place instead of peace and adjustment. Without realizing it, I developed a strong passion for the country I was the delegate for, and further realized during the three days of MUN, that this was true for every delegate that was participating. I was able to see the complexity of diverse countries trying to make decisions in unison, and to be a part of this was exciting. There was also a small offering of sushi at the very end. Overall, the MUN is a highly enlightening course, and I believe everybody had some great fun as well.

世界各地で、平和のために貢献する人がいるとともに、傲慢な態度により問題が巻き起こす人もいます。何ヶ月かリサーチやディスカッションを進めるうちに、本当に私は世界の出来事に対して無知だったなあという認識が生まれました。そのうちに、私は自分の

代表していた国に対して情熱的になっていき、更に MUN の3日間を通してその情熱はみんな共通なのだと分かりました。それに続いてそれぞれの国がそれぞれの違った意見を主張しつつ、全体でひとつの決断を行うことの複雑さを学び、興奮しました。最後に出た寿司にも、興奮しました。まとめると MUN はとても成長できる機会でもあるし、同時に楽しむことのできるすばらしいクラスなのです。

Human Trafficking, by Kana Yokoyama (PARAGUAY)

Can you believe that in this world between 800,000 and 900,000 people are trafficked across and within borders each year? Can you believe that children under your ages are trafficked and used as child soldiers? At the MUN, we debated ways to prevent this worldwide hideous crime. As the delegate of Paraguay, I remained conscious that this crime will never end because of the poverty going on in the developing countries. People reading this Interculture, please note in your mind, that many people are trafficked and left without a single right, while you are living peacefully.

あなたはこの世界で毎年 80 万から 90 万人の人たちが取引されていると信じられますか？あなたは自分の歳より下における子供たちが少年兵として取引され、利用されていると信じられますか？今回の MUN で私たちは、この世界的な犯罪の防止方法について討論しました。私はパラグアイの代表としてこの犯罪が発展途上国の貧困が進む限り、決して終わらないと理解しました。このインターカルチャーを読んでいる皆さん、世界には自分の権利も主張できずに売買されている人たちがいることを決して忘れないでください。



太鼓演奏でテレビ出演

林 朋孝
高等部2年

僕が初めて太鼓を観たのは、小学校低学年の頃でした。毎年、地元の大阪城付近にある大阪で一番古い神社である生國魂(いくたま)神社で7月11、12日に行われる夏祭りに、よく友達と遊びに行っていました。夜店をまわっているといつも聴こえてくる太鼓の音に引き付けられるように境内に行ってみると、大きな矢倉の中に大きな太鼓があり、綺麗な衣装を身にまとったお兄さん6人が力を合わせて太鼓を叩いていました。しばらく観ていると、ザワザワとお客さんがたくさん集まってきました。時計を見てみると8時前でした。実は、生國魂神社では夜8時になると「お練(おねり)」という400年もの歴史がある伝統行事が行われます。そのたくさんのお客さんは「お練」を観るために境内を囲むようにして集まったのです。境内にいた僕は、これは見なあかんと思ひ、列の最前列に立ちその「お練」を観ることにしました。矢倉から出される太鼓は、6人乗りで背もたれが枕に見えることから「枕太鼓」と呼ばれ、下に滑車付いているためゆっくりと動きだし境内に現れました。まだ小さかった僕から見ると太鼓はとても大きく見え、その迫力と風格に驚いたのを今でも覚えています。そして、「お練」にまつわる歴史を説明するアナウンスが終わると、「願人」と呼ばれる6人が叩き始め、太鼓の周りには「にないて」と呼ばれる人達が太鼓を境内の端から端まで猛スピードで走らせ、お客さんの居る

寸前で急ブレーキをかけるのですがあまりの勢いに太鼓を止めきれず、お客さんの中に飛び込んでしまっています。この時点で僕はその迫力にあっけにとられ、すでに口がポカんと開いていました。しかしこれだ

けでは終わりません。走り終わった太鼓は境内の中央に移動され、太鼓をさらに激しく叩くのと同時に「にないて」の人達はその太鼓の片方を持ち上げ横にボタンと押し倒してしまいました。しかしそれでも「願人」は叩くのを一切やめず大きな声を出して真剣な面持ちで地面に投げ倒されないように必死に背もたれの枕にある綱を片手でしっかりと握り、片手で太鼓を叩いています。すると今度は太鼓を起こした勢いでそのまま逆側に倒したりだとか、グルグル回したりだとか、こっちが手に汗握ってしまうテーマパークのような危険かつ豪快な演技で本当に度肝を抜かれたような気分で見ました。そしてその「願人」6人の男らしさと、どんな状態でも絶対太鼓を叩くのを止めない根性がとてもカッコよくて、その日から「願人」は、仮面ライダーのような地元のヒーローに僕の中ではなり、そして憧れるようになり、いつか僕も「お練」で太鼓を叩



けるような「願人」になると夢見るようになりました。これが太鼓を始めたきっかけです。そして小太鼓、中太鼓、今紹介した「枕太鼓」の三つに分けられる太鼓の内小太鼓に入りました。小、中太鼓は「枕太鼓」を縮小したような感じで主に体がまだ小さい小、中学生が叩くものです。小学校高学年になると中太鼓、中学に入ると「枕太鼓」に入ることができました。中2になると念願の「お練」を背がでかいからの理由だけで叩かしてもらうことになりました。実は「お練」の練習はなくていつもぶっつけ本番らしく、綱の持ち方だけ教えてもらいあとは気合で行けといわれました。まだ2年目だし緊張しい僕は自分の身も危ないかもしれないし、しかも何百人の前でやるため本番までずっと固まりました。でも「願人」6人の頭の人に気合のピンタをされその勢いで無我夢中に「お練」をしました。終わってみるとゲーができないほど握力が無くなり所々あざがありました。とても楽しかったのを覚えています。それから毎年「お練」出させてもらうようになり、2年前にはオーサカキングに「枕太鼓」が呼ばれ「お練」をさせてもらいました。本当に良い経験になりました。

そして今回、2月11、12日に東京のNHKホールで行われた「地域伝統芸能まつり」に「枕太鼓」が出演させてもらえることになりました。「地域伝統芸能まつり」は、日本全国から伝統のある踊りだとか遊びなどを集結させた「お祭り」です。最初は、毎年紅白歌合戦をやっている所だし、出演者にはリボンを付けられたりと芸能人になれたような気分がわくわくしていました。しかし前日のリハールは夜の12時近くまでしたりと、少しずつプレッシャーが襲いかかってきました。その日バスで東京までやってきたのもうしんどくてすぐ寝たかったのですが、話し合いだったので結局3、4時間しか寝

(次ページ★へ続く)



左が林朋孝君

異動のお知らせ

<復職>

加納重美

保健体育科

今年度から、保健体育科に戻ってきました加納です。しばらくの間、文部科学省の海外教師として在外日本人学校に派遣が決まり、お休みさせていただいていました。

現地校での教員経験はあったのですが、今回は海外にある日本人学校といった違った学校での経験をさせてもらってきました。この3年間で、学んだたくさんことを、できるだけみなさんの為に役立てたいと思っています。今は、久しぶりの千里国際学園にワクワクしています。早くみんなのすごいパワーとたくさん笑顔を見たいと思っています。また、日本人学校から帰ってきた皆さんは、この学校で驚くことや不安になることがあると思います。私は、ここで10年以上働いていたのですが、今戸惑っていることがたくさんあります。どうぞ、気軽に話しかけて相談してください。その気持ち共感できると思います。

保護者の皆様へ

在外教育施設での経験を、これからの子供たちの教育に生かしていきたいと考えております。どうぞ、よろしく願いいたします。

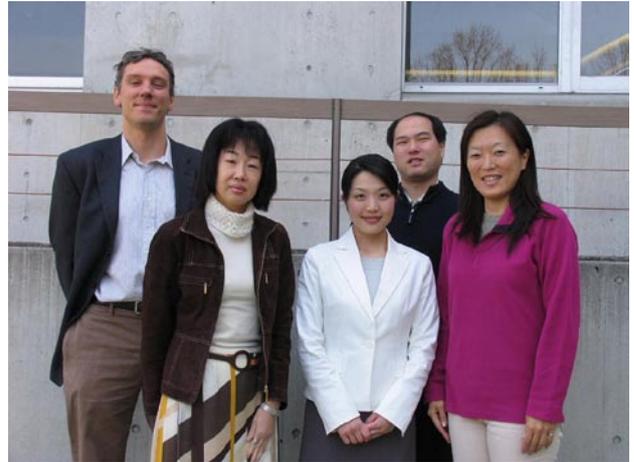
<新任>

鷹野由紀子

国語科

この4月から国語を担当することになりました鷹野由紀子です。

この学校に来る以前は、園田学園高等学校で3年間中国語を教えていました。教えていたとはいうものの、中国語を自由に操ることができるわけではなく、どうすれば上達するのかと悩みつつ勉強の毎日を送っています。また、関西大学第一高



向って左から Arunski、増尾、鷹野、宮澤、加納の各先生

等学校では2年間国語を教えていましたが、同じ沿線ということもあり、当時は通勤途中の車内でよくこの学校の子どもたちを見かけました。

懐かしく眺めながら以前の学校を通過するおかげでしょうか、それとも千里国際学園の校風のおかげでしょうか。何日か通うとその学校に慣れてしまうものですが、私はいまだに毎日新しい気持ちで千里国際学園に通っています。

いつまでもこの新鮮な気持ちを忘れずに頑張っていきたいと思っています。どうぞよろしく願います。

増尾美恵子

社会科

はじめまして！社会科の増尾美恵子です。この学校にみんなと共に学びすごせることがうれしくて仕方ありません。

(次ページへ続く)

(★前ページの続き)

れないまま本番の日を迎えました。昼には楽屋に入り、衣装を着て本番をいまかいまかと待っていました。その時本番で「お練」を叩く6人が発表されました。すでにめちゃくちゃ緊張していたので、選ばれたけれど本番でミスしたらやばいから選ばれたくないような複雑な心境で発表を聞いていました。すると大きな声で僕の名前が呼ばれました。選ばれたメンバーの中には20代の人とかもいるのに「枕太鼓」では一番年下のガキな僕が選ばれたのでびっくりして「はい」もまともに言えませんでした。それから数時間緊張し続けやっとなら僕らの番がやってきまし

た。こうなったら気合やと開き直っていいかと思っていました。NHKの関係者からあまり激しくやると舞台が壊れるのでやめてくださいと言われていたので、いつもよりかは、ましなやと少し安心していました。その結果本番では元気に笑顔で演技できたのでとてもよかったです。演技は大成功に終わり、先輩の方からたくさん褒めてもらったので本当によかったです。関係ないですが、いつもニュースで見ているアナウンサーにマイクを向けられたのが一番うれしかったです。このお祭りは僕にとって本当に良い経験になりました。これができたのも先

輩の方々や関係者のみなさんのおかげなので本当に感謝したいと思います。そしてこれからも太鼓がめっちゃ好きだから続けていきたいと思っています。もしこれを読んで興味をもってくださった人がいれば、このインターカルチャーが渡される頃にはテレビ放送は多分終わっているのですが、是非7月の祭りに来て生で見てください。ストレス解消になるかもしれません。太鼓をやってみたいという人も大歓迎です。<放送日時> NHK 衛星第2テレビ3月4日(土) 13:30-17:00、教育テレビ 3月11日(土) 14:35-17:00、衛星ハイビジョン4月23日(日) 14:00-16:25

バイリンガリズム通信 SIS の生徒のコードスイッチング

難波和彦
英語科

先日の入学式の新生歓迎スピーチで、高校生徒会の SIS/OIS の会長二人が、日本語と英語を混ぜてしゃべって見せて、これがこの学校でよく聞かれる会話です、話をしていました。これがコードスイッチングとよばれる現象で、このバイリンガリズム通信でも何年にも渡って書いてきたことでもあります。SIS/OIS の生徒のコードスイッチングは、よく耳にするのですが、実際にどんなものなのかを詳しく調べてみようと考え、何組かのバイリンガルの生徒の会話を録音してみました。今回はその中で先日卒業していった 12 年生の 3 人の生徒 (女子) が、卒業前に SIS での学校生活や、これから始まる大学での生活について、ざっくばらんに語ってくれた会話の中から、コードスイッチングがどんなふうになっているのかを見てみたいと思います。

この 3 人は、それぞれ日本人の家庭に生まれ育ち、姉妹がいます。3 人の簡単な言語的なバックグラウンドは、次のような感じです。A: 日本で生まれ、小学校から台湾のインターナショナルスクールとアメリカの現地校にあわせて 8 年間海外で過ごし、中学 2 年次に SIS に編入。B: シンガポールで生まれ、インターナショナルスクールに通い、11 歳のときに日本に来て、まず OIS に編入その後 SIS に編入。C: 日本で生まれ育ち、小学校の 2 年生から 4 年間アメリカで過ごす。帰国後日本の小学校→SIS に入学。3 人ともに日本語・英語がバランスよく発達したバイリンガルで、どちらの言語でも自由に自分の考えを、話し言葉でも書き言葉でも表現でき、人の考えを理解することもできます。

A: だって自立するのってたいへんだけだ
'cause, When I go, I have to 自炊する
Some people do it frequently
because they are really まめ
but I don' do it that often

まず最初に見てもらうのは、卒業してから一人暮らしを始めることについて、A が語っている部分です。一行目 - 日本語の後、基本的には英語に切り替わっていますが “have to [動詞]” の枠に日本

語の動詞 = “自炊する” が、“they are really [形容詞]” の枠に日本語の形容詞 “まめ” が挿入されています。ここでは、英語が Matrix Language= “母体言語” であるところに日本語が Embedded Language= “埋め込まれた言語” として、挿入されているわけです。なぜ英語の中に日本語を挿入したのでしょうか? “自炊する” や “まめ” という言葉を英語でどういふか知らない、あるいは英語にはふさわしい言葉がないから、という説明のしかたもあります。この会話が英語しか話せない人とのものであれば、おそらく英語をそのまま使っているところでしょう。バイリンガルの人は、言葉を選ぶときに、モノリンガルの人よりも、選択肢がさらに多くあるので、その場面に (そして話し相手によっても) 最もふさわしい言葉を選ぶことができると言えるでしょう。“自炊する” という表現は、一人暮らしをして自分で食事の準備をすることを表す formulaic language = 決まり文句で、“まめ” は、働き者であることを表す決まり文句です。決まり文句を使うときに、その周辺でコードスイッチングが起こっているのも良く見られる現象です。

1-A: めっちゃなつかし
2-B: Look at (名前) She's changed a lot
3-C: ほんまや
4-D: She's so 初々しくない? まだ
5-C: な～えしかも look at (名前)
6-B: ていうか look at her skin! No wrinkles

次に見てもらうのは、3 人が中学のころのクラス写真を見て、昔を思い出して話をしている部分です。3 行目までは A: 日本語→ B: 英語→ C: 日本語とそれぞれが一回の発言にひとつの言語を使っていますが、4-6 行目は、一人の発言の中に日本語と英語が両方使われています。5 行目や 6 行目では、Discourse marker= 会話の流れを操作する言葉 “しかも” や “ていうか” が、日本語で、伝えたい内容そのものは英語で表現されています。このふたつの discourse marker は、また決まり文句としての性質も持っています。興味深いのは、4 行目です。”She's so” という英語の枠組みのなかに本来であれば、She's so [clever] とか She's so [cute] などの形容詞が入るところですがこの写真で受けた印象を一番的

確に表す言葉として、日本語の [初々しい] が挿入されました。そして “初々しい” という言葉が trigger = 引き金になって、同意をもとめる日本語 “～ない?” や未完了を表す副詞 “まだ” などが後に続き、英語から日本語へのスイッチが起こっています。これは単純な insertion= 挿入だけではなく、triggering= 引き金の作用が起こっているといえます。

B: でも Sometimes when I read Japanese 文庫本
やっぱ表現とかことわざっていっぱいあるでしょ日本語には
それがなんかわからないからせつかくいい作品とか読んでても
expression
I can't understand the expression so it doesn't come to me

3 つめのサンプルも、同じ観点から説明できるものです。英語だけでなく日本語も完璧だと他の二人に言われた後の B の発言です。最初の “sometimes when I read Japanese []” の英語の文に日本語の単語 “文庫本” が挿入 = insertion されています。日本の文庫本と、paperback は、大きさがちがうし、“文庫本” を使う方が、ここではしっくりいくからでしょう。この “文庫本” が trigger = 引き金となって、そのあと日本語が続きます。今度は “作品とか読んでても” の次に英語 expression が出てきて、これが trigger となって、英語へのスイッチが起こっています。

以上見てきたように、code-switching には、insertion= 挿入、discourse marker = 会話の流れを操る言葉、formulaic language= 決まり文句、triggering= 引き金といったようないろいろなプロセスが複合的に働いていることがわかります。ひとつの観点だけから、説明をしようとするとうまくいきません。5 月に、バイリンガリズム関係の学会で、コードスイッチングを別々の観点から研究している人が 3 人集まって、ひとつのデータをそれぞれの観点から分析するという発表が行われます。僕はそのうちで、文法的な観点からの分析をすることになっています。次回のこのコーナーで、その様子を書かせてもらおうと考えています。

学年だより

● 中部部1年生 (7年生)

新鮮な気持ちを忘れないように

難波和彦

1組担任、英語科

入学式は生憎の雨降りでしたが、SISの在校生たちの暖かい歓声に迎えられ、また8年生の人たちが、企画してくれた校内ツアーやゲーム大会などのおかげで、新7年生の54人は気持ちよくさわやかなスタートを切ることができました。

担任団は、3人だけですが、バラエティに富んでいます。理科・体育・英語と全く性質のちがう教科を教えていますし、教員としての経験も、海外の学校で教えたり、日本の他の学校で教えたりと全然ちがいます。海外に住んだ経験も、シンガポール、アメリカ、イギリスと様々です。これだけ違ったバックグラウンドがあると、意見があわないのではないかとも思われますが、全くそんなことはなくて、一致団結してやっています。ひとつのことを考えるときに、自分の思ってもみなかった考え方を聞くのは、楽しいことです。我々担任団の中では、多様性=Diversityがあることを楽しんでいます。自分とちがった考え方をする人から、学ぶことはいろいろあります。54人の生徒たちもいろいろなバックグラウンドを持って入学してきました。海外での経験がある人もいればない人もいます。2つの言語が話せる人もいれば、英語を始めて習う人もいます。地元の箕面から来ている人もいれば、神戸、京都、和歌山からはるばる通っている人もいます。生徒たちのバックグラウンドも本当にバラエティに富んでいます。自分とは違った、いろいろな人がいて、いろいろなことが知れることが楽しい、と思うようになってほしいと願っています。

学校生活のほうでは、毎時間違う教室へ移動する、という今までになかったスタイルに戸惑ったりしながらも、新鮮な気持ちで、毎日を過ごしている様子が、終わりのSHRに書いているジャーナルを読んでいるとうかがえます。初めてのロングホームルームでは、クラスで委員を決め、学園祭の話を始めました。委員のほうは、class reps=(学級代表)、secretaries=書記、school festival reps=学園祭委員、environment reps=環境委員、newsletter

editors=新聞委員、library reps=図書委員といった委員を基本にしていて、クラスの全員が何らかの委員になりました。それぞれの場所で、クラスの代表としてリーダーシップを発揮してってくれることを期待しています。そして、SISで最初の学期-春学期、一年間で最も大掛かりな学校行事と言ってもいい学園祭がもうすぐやってきます。“お祭り”“楽しそう”というイメージが先行しますが、担任団としては、たくさんお金をもうける、といったようなことではなく、「クラスのみんなが一生懸命協力してとりくみ、学園祭をしたことでみんなが仲良くなる、なにかをつくりあげたという達成感を持てる」ような取り組みになるように、していきたいと願っています。結果としてお金が儲からなくても、お客さんが少なくても構わないと思います。各クラス8名ずつの学園祭委員を中心にアイデアを話し合っています。どんなものができあがるか楽しみです。

これから6年間、今この入学したときの新鮮な気持ちを忘れないように、時々思い出しながら、楽しく充実した学校生活を送ってほしい、と願っています。

● 中部部2年生 (8年生)

8年生の最初にあたって

高橋寿弥

1組担任、数学科

いよいよ8年の春学期が始まりました。8年生の多くが本校での2年目の学園生活に入りました。中部部にも新7年生を迎え、彼らにも後輩ができました。今年度の最初の仕事として、8年生は新7年生のために、「オリエンテーションの日の校内ツアー」と「入学式の日の7・8年合同のゲーム大会」をやりました。校内ツアーは、みんな時間厳守で集合し、見事に全員が立派に役割を果たしました。またゲーム大会は、3階会議室で行われましたが、人数が120人位いて、なかなか進行しにくかったと思いますが、これも見事に役割を果たしてくれました。彼らの多くが、「1年前は、私たちもこんな感じだったんだ」と、頭に思い描いたことでしょう。本当にしっかりやってくれてありがとう!!!

次に、7年時の3月1日(水)に行われた「7年生クラス対抗劇披露大会」の状況を記しましょう。当日は各クラスとも

約15分で劇を演じました。1組は「(現代風)シンデレラ」、2組は「おとぎ話の世界に迷い込んだスリラーたち」、3組は「(コミカルな)シンデレラ」を演じたのですが、各クラスともその組の「個性」が出ていて、非常に良かったと思います。全員で練習する時間があまり無かった中で、みんなよくやったなあ、と大変うれしく思っています!!!

インターカルチャーの3月号で書いたように、みんな「去年より高い目標を持って、2年目の学園生活に取り組んでいく」ことを念頭に入れて、昨年度より充実した1年を送って欲しいと思っています。今年もしっかり一丸となってやっていきましょう!!!

● 中部部3年生 (9年生)

5 ways to help middle school students

Mark Avery

1組担任、英語科

Firstly, I would like to welcome two new students into our grade level. Yukiko Tahara comes to us from New Jersey and Tsubasa Nakata has returned to Japan from Indonesia. It is great to have them at school. We also welcome Ms. Hirai from the PE department and Dr. Shinmi from the science department to our grade and thank for their help in ensuring a smooth start to the year.

The overwhelming sense of excitement at the beginning of a new school year is invigorating and I have never felt it more than at this school. In January, we often hear people talking about New Year resolutions they have not been able to keep. This may be because January is not necessarily the best time to make such promises. There are too many distractions. When I arrived in Japan, I was told that spring symbolized the beginning of a new year more than New Year itself. I found this a curious idea then but 14 years later, I also feel like April is the time to re-evaluate. The beginning of the new school year is the best opportunity for students to assess their own performance up until now and find ways to ensure an even stronger

sense of satisfaction at the end of each day. Remember advice you received last trimester and act on it. Remember aspects of your performance you were praised for and build on them. I am pleased to report that I have already seen evidence of some students' resolve to make this year a positive one.

This trimester we will be busy with the school festival. The theme this year is "Wagokoro" which, when loosely translated, refers to anything that reflects the Japanese spirit. This may be more of a challenge for me, but I am looking forward to seeing what the three classes come up with. As long as we all work together in a spirit of cooperation, the school festival will be a success. Again, we need to remember to grow from our experience over the last two years to make the good things better and avoid past problems.

The beginning of a new school year can be the start of a journey toward success if parents, students and teachers work together. I read an article recently by Dr. Russell Robertson (Associate Dean for Faculty Affairs and Associate Professor of Family and Community Medicine at the Medical College of Wisconsin) in which he lists ways the home can help middle school students get a new school year off to the best start. He listed 14 ideas. I chose the five I liked the most.

1. Never stop asking your children about their day or what is going on in their lives - even if they respond with only a few words or just silence. Don't get angry if the response is brief. If it is, ask them to tell you about one specific element of their day rather than posing an open-ended question.

2. Share meals together without TV or music in the background.

3. Create an environment in your home conducive to the completion of schoolwork and one that can flex around school related activities.

4. Make wise media choices with regard to what you and your family watch on TV, the movies, and what

you view on the Internet.

5. Have a family-centered entertainment area in your home where all the media are concentrated.

It will probably be May by the time you read this so I hope students reading it will reflect on the start they gave themselves this year and remember that it's not too late to change things that aren't yet going the way you'd like them to be. If you haven't got your homework diary yet, now might be the time to get one. If you are inactive in your classes, now might be the time to find ways to become more involved. If you are not really enjoying yourself as much as you'd like to be, ask yourself why. If you are already going along swimmingly, then congratulations and let's look forward to a brilliant year in grade nine.

●高等部1年生 (10年生)

高校生活は自分発見プロジェクト

田中 守

1組担任、理科

高等部1年は61名の内部進学生に加えて26名の新しい仲間を迎えました。とても元気です。やる気満々、みんな張り切っています。まずは入学式前日の新入生オリエンテーションでは、世話係のボランティア達の活躍がありました。関係の先生の評価、高いです。学年委員会も動き始めました。LHRなどの学年活動の運営の責任者たちです。1回目のミーティングからもりあがり、議論は白熱。すごいパワーでした。最初のLHRは学年の親睦会をアレンジしてくれました。にぎやかな1時間でした。そして次は宿泊行事も計画しているようです。学園祭も迫っています。きっと何か、魅せてくれることでしょう。この学年・・・なかなかやるなあ。というのが、今の僕の素直な感想です。

自信がない・・・自分の将来がわからない・・・そんな悩みも耳にします。でも高1で将来がはっきり見えているほうがめずらしいのです。すべてはこれから。そう、これから「自分」を見つけていくのです。スポーツに、クラブに、音楽に、校内外のいろいろな活動・・・もちろん勉強も。なんでもいい。いつも何かにチャレンジしてみたい。忙しくても何とか

工夫して、どんどん未知の世界に飛び込んでみてほしい。そこで自分を試してみたい。まだ挑戦したことのないことに、勇気を出してあえて立ち向かってみましょう。その一歩がすばらしい可能性につながっているかもしれないから。

失敗したらどうしよう。そんなのできない。そう考えるのも無理はないかもしれないけど、だけど、恐る恐るでいいから、まずは一歩前に踏み出してみなければ何も始まらない。成功も挫折も、ほんとはそんな結果はどうでもいいことで、そんなことよりその経験がどれだけ君たちを成長させてくれることか。そして何より、果敢に挑戦しようとした勇気が、君に自信を与えてくれる。その繰り返しの中から、自分の本当の姿がだんだん見えてくるのです。自信に満ちあふれてくるのです。やがてその向こうに自分の未来がみえてくる。いろんな経験をして自分を知ってる人間ほど強いものはない。気がついたら不安なんてどっかに吹っ飛んで、将来のことを考えたらもう夢と希望でいっぱいいたいへん・・・。なんてさらっと言えちゃいます。

チャンスはそこらじゅうにころがっています。なにか少しでも心に響くものがあったなら、それが君にとってのチャンスです。勇気を少し出してチャンスをつかもう。自分の手でつかもう。君たちが高校生でいられるのは3年。たった3年。だからこそ、やるのは今しかない。そして僕たちはそんな前向きな君たちを、いつも応援しています。それがこの学校なのですから。

●高等部2年生 (11年生)

有意義な高校生活を

馬場博史

1組担任、数学科

新11年生は新しく2名の担任、4名の生徒を迎えてスタートしました。担任は1組馬場(数学)、2組志垣(生活科学)、3組池田(社会科)、4組土佐(理科)です。編入生は1組が入学式でスペイン語による生徒宣誓をしたメキシコからのロベス・アメスクア・ユリッチさん、2組はアメリカからの水口紅梅さん、3組はインドネシアからの杉浦美穂さん、そして4組は中国からの奥恵美子さんの4名です。

さて春学期といえば学園祭ですね。11年生ばかりがそろった生徒会執行部の

初仕事でもあります。これから高等部のリーダーとしてどれだけ活躍してくれるか楽しみです。また、各 HR もどのように今年のテーマ「和心（わごころ）」に沿った内容にしようかと張り切っています。1組では当日みんなで甚平・浴衣を着て焼きとうもろこし屋さんをしようと相談しています。だんだん高学年になるにつれて教職員に頼ることが少なくなるのですが、今回もどこまで自分たちの力で作り上げていくのかこれまた楽しみにしています。

これから1年間、いえ卒業するまでの2年間、勉学・スポーツ等のいろいろな活動に精一杯打ち込んで、有意義な高校生活を送ってください。私たち担任と保護者の方と協力してみなさんを見守っていこうと思います。

(学年ホームページを随時更新しますので、時々チェックしてみてください。http://www.senri.ed.jp/sis/classof2008/)

●高等部3年生（12年生）

心と体のバランスを！

水口 香

3組担任、英語科

4月になり、12年生にはいろんな変化が生まれました。新たに2名の編入生を迎えました。教室が建物中央部に移動し、新たな雰囲気が生まれました。また最高学年と呼ばれるようになり、気持ちに張りがでてきました。そして学年旅行を通して友達の輪が広がり、学年全体により強い団結力がでてきました。(現在、学園祭に向けて学年全体で動いています。)

しかし、同時に SIS での生活を後1年にした12年生は今までにない心の変化を感じている人もいます。こういった状況に付きものなのはストレスです。特に将来についての不安を抱える人たちはストレスから心のバランスを崩しやすくなりま

す。ストレスがプラスの方向に働けば、やる気や集中力を生み出す原動力となりますが、逆にマイナス方向に働くと、落ち込んだり、やる気が起こらなかったり、気だるさを感じたり、よく眠れなくなったりすることが少なくありません。幸いに学校では、PEの授業で体を動かしたり、Art、Music、書道のように気持ちを落ち着けて専念できる授業があります。受験科目でなくても、学校で行う授業はどれも大切なものです。全ての授業をしっかり受け、また食事や睡眠など生活習慣に気をつけて、心と体をバランスよく働かせながら、前向きにストレスに打ち勝ってください。

12年生学年団はもちろんのこと、学校全体で皆さんを支えていきます。心残りのないよう、1年間しっかりとがんばってください。

今月の詩

以前に、毎号のインターカルチャーに折々の詩を紹介していたことがありました。今年は久しぶりにまた連載してみたいと思います。

祝婚歌 (詩集『二人が睦まじくいるためには』より)

吉野 弘

二人が睦まじくいるためには
愚かであるほうがいい
立派すぎないほうがいい
立派すぎることは
長持しないことだと気付いているほうがいい
完璧をめざさないほうがいい
完璧なんて不自然なことだと
うそぶいているほうがいい
二人のうちどちらかが
ふざけているほうがいい
ずっけているほうがいい
互いに非難することがあっても
非難できる資格が自分にあったかどうか
あとで
疑わしくなるほうがいい
正しいことを言うときは
少しひかえめにするほうがいい
正しいことを言うときは
相手を傷つけやすいものだと
気が付いているほうがいい
立派でありたいとか

正しくありたいとかいう

無理な緊張には

色目を使わず

ゆったり ゆたかに

光を浴びているほうがいい

健康で 風に吹かれながら

生きていることのなつかしさに

心と 胸が熱くなる

そんな日があってもいい

そして

なぜ胸が熱くなるのか

黙っていても

二人にはわかるのであってほしい

今回は、結婚式を挙げた二人に送る言葉という詩ですが、どんな二人の人間関係にも通じる面があると思ひ、取り上げてみました。自分を大切に、他の人を大切に、という5Rスペクトを実際にやってみようとする、いろいろ問題が起きることがありますよね。この詩は、その実行の参考になるのではないのでしょうか。

この詩のドイツ語訳が、聖書の言葉とともに、日本女性とドイツ男性がドイツの教会で結婚式を挙げた際に読まれたのだそうです。この花嫁の国日本の詩は、出席した人々に大きな感動を与えたといひます。(この逸話についてもっと知りたい人は、収録されている詩集を見てください。)この詩に示されているいき方がいいなと思う人も、そうでない人もいひでしょう。ある種日本的といわれるいき方の知恵なのかもしれませんね。あなたはどう思ひますか？

(青山比呂乃 / 図書館)

留学オリエンテーションのご案内

栗原真弓

カウンセリングセンター

本学園では、新たな時代を担う子どもたちのために、大変多面的かつ深く考えられた教育が施されています。ですからここで学べることは非常に多く、さまざまなことを身につける機会に溢れています。留学しなくても国際的視野で物事を捉える力や語学を習得することは本学園においては十分可能です。しかし、色々な理由から SIS 在籍中に海外の学校に留学（最長1年）する生徒が毎年5～6人位います。留学するからには、海外で充実した日々を過ごしてほしいと願っています。そして良い結果をもたらすためには十分な準備期間が必要です。

4月に全生徒に配布された『生徒と保護者のためのハンドブック』の中の「留学に関して」(P.14)にあるとおり、在籍中の留学については SIS の規定があり、定められた手順に従って準備を進めていくことになります。一方、交換留学生とし

て留学する場合は、選考試験が出発日の1年前から始まります。例えば10年生の夏に出発する場合は、9年生の春学期に選考試験が実施される団体もあるので、それ以前に留学窓口であるカウンセリングセンターに相談することが求められます。

カウンセリングセンターでは、2006年度より5月（8～10年生対象）と11月（7～10年生対象）に「留学オリエンテーション」と称して SIS 在籍中の留学についての説明会を実施することにしました。「留学オリエンテーション」では、留学規定や手順について詳しく説明し、交換留学幹旋団体や試験日程について紹介します。また、かつて留学した SIS 高校生にもその体験談や体験者ならではの助言などを話してもらう予定です。留学についての情報が欲しい人や既に計画中の人は、ぜひ参加してください。保護者の

方もどうぞご参加ください。日時・場所は、下記の通りです。

日時：5月31日（水）放課後 3:45 pm～

場所：3階会議室

※スカラシップ交換留学生（関西地区から4名）の募集案内もきています。1989年4月2日～1992年4月1日までに生まれた人で、学校長から推薦され、かつ心身ともに異文化体験の適応力があり、相応の英語力を有する人が対象です。留学参加費用（118万円）の半額が奨学金として免除されます。1次募集の締め切りが6月5日なので、詳しいことを知りたい人はなるべく早くカウンセリングセンターに問い合わせてください。



健康に過ごせますように

弥永千穂

保健室

保健室は SIS・OIS の生徒、来校中の保護者の方、教職員が病気やけがをした時に応急処置を行い、休息のできる場所、自分の体に関して相談できる場所です。スクールナースが朝の8時から4時半の下校時刻まで保健室にいます。ベッドルームには3台のベッド、処置室に1台の処置台があり最高4名まで休息することができます。薬は一般家庭の救急箱にありそうなものが置いてあります。けがをした場合や急に具合が悪くなった時（自分を大切にすることは授業中であれば先生の許可をもらいすぐに保健室へ来てください。その他ひどくない痛みや風邪、シブの交換、なんとなく気分が悪い場合など緊急でない場合は授業の合

間、ランチタイム、アンスケ、放課後を利用してもらうとよいでしょう（学習を大切にします）。

Respect for self（自分を大切にすること）自分の体調を知る、睡眠をしっかりとり、体調が悪ければ両親と相談して登校するか受診するかなどを決める、体や性に関しての不安はひとりで抱え込まず相談する、朝食やランチをきちんととり、タバコやお酒に手をださないなど。両親やその他大人やスクールナースからアドバイスをもらいながら自分の体を自分でケアしていける力をつけていきましょう。

みなさんが上手に自分の体と付き合いながら年間健康に過ごせますように。

千里国際学園基本方針

千里国際学園では、自分の行動に責任を持ち、よい人間関係を維持していく能力が、生徒各自に備わっていると信じます。この考えにもとづいて、次のような行動の目安がつけられています。

<5つのリスペクト>

- 自分を大切にすること
- 他の人を大切にすること
- 学習を大切にすること
- 環境を大切にすること
- リーダーシップを大切にすること

千里国際学園図書館へようこそ

青山比呂乃

図書館

* 図書館紹介

新入生、編入生のみなさん、千里国際学園図書館へようこそ。卒業生と入れ替わりに、新・編入生が92名入って、図書館もまた活気がでてきました。図書館スタッフは、2名の教員以外に4名が半日づつ働いています。また、図書館の2階は、語学学習センター、マルチメディアコンピュータ教室、OIS 情報科研究室がはいったマルチメディアフロアで、OISIT の先生方のほかに、図書館スタッフが交替で1名常駐し、コンピュータスタッフも1名常駐しています。

図書館1階には100席用意していますが、いっぱいになってしまうこともあります。SISとOIS両方の学校、幼稚園から高3までの720名ほどの生徒、また教員職員、保護者の方々、しかも日英を始めとするさまざまな世界中の文化を持つ人たちが皆で使う図書館です。お互いに気持ち良く使えるように、心掛けましょう。

なお、図書館は生徒の利用の妨げにならない範囲で保護者も利用することができます。初めて利用する際には、デスクにいるスタッフに声を掛けてください。利用の規則は生徒と同じです。ただし、本を借りる場合は、カウンターで登録の手続きをしたうえで、ご本人の責任において借出・返却をしてください。生徒が保護者の名前で、または保護者が生徒の名前で本を借りることはできません。

家族の方が読書にいそまれる姿は、生徒達にもきつとい影響を与えたいと思いますので、どうぞご利用ください。

* 保護者ボランティア近況

この半年、SISの旧高3保護者1名の方が定期的に、図書館の仕事のお手伝いをしてくださいました。おかげでたくさん本のカバーを掛けて棚に並べることができました。ありがとうございました。

* 日本語図書 歴代貸出記録

ここ数年のインターカルチャーで、日本語図書最多貸出記録の報告をしています。今回は、もう少しの所で、第1位の記録が破られる事はありませんでしたが、3月に卒業した学年の3位までと、今までの歴代の記録を紹介します。

今年は、久々の男子の登場です。馬場宏高くんの中学3年の貸出冊数は798冊で、これはダントツの歴代1位です。高校3年間の冊数は、181冊だったため、6年間での歴代1位にはなりませんでしたが、それでも学年3位の人より多いですね。

2006年3月卒業生 日本語図書最多貸出記録(6年間在籍)

- 1位：馬場宏高くん 979冊
- 2位：青木光理さん 250冊
- 3位：土師春菜さん 130冊

1997～2006年歴代卒業生 最多貸出記録

- 1位：2002年 刺賀繭里さん 1043冊
- 2位：2006年 馬場宏高くん 979冊
- 3位：2002年 新井隼子さん 445冊

- 4位：1998年 沼田貴範くん 376冊
- 5位：2003年 角田 瞳さん 346冊
- 6位：2001年 松宮寧子さん 328冊
- 2003年 伊藤 愛さん 328冊
- 2005年 曹 千紘さん 328冊
- 7位：2004年 有田 梓さん 305冊
- 8位：1999年 井上愛子さん 302冊
- 9位：1997年 廣瀬裕紀子さん 291冊

残念ながら、コンピュータシステム上の違いから、英語図書の記録はありません。図書館に読みたい本、使える本がなかったのかもしれないし、借りたから読んだというわけでもない。借りずに使っていた人もいるでしょう。みんな在籍期間も違うし、英語ならたくさん借りたのに！という人もいます。そういう意味では、簡単には誰が一番とは言えないのですが、一つの記録としてみてください。

皆さんもたくさん借りて、せっかくの図書館をとことん使ってみませんか。

* 蔵書点検報告

昨年度末、3月15日冬学期最終日の午後から17日の3日間に蔵書点検をしました。今回は、20名の方がボランティアで汗を流してくれました。内訳は、旧中1 1名、中2 8名、中3 5名、高1 4名、高2 2名で、内男子は1名でした。

おかげで、日英合わせて5万8千冊の図書のデータを全て入力し、必要な図書の移動をほぼ終えることができました。丸2日間、びっちり働いてくれた人もたくさんいて、たいへん助かりました。本当にどうもありがとう。

その結果、今年も行方不明の図書が判明しました。また今回は、以前に紛失・不明になっていた本が26冊も見つかっています。このリストには挙げていませんが、2001年度分1冊 2002年度分2冊と5、6年前のも出てきていて驚きです。

リストを見て、心当たりのある方、教室の片隅などどこかで迷子の本を見かけた方は、ぜひご連絡ください！





<行方不明の日本語図書リスト>

- 2005 年度不明分 12 冊 ¥14,848
- 209.7 ニシユ 16 20世紀の歴史 第16巻 平凡社 ¥2,800
- 210.08 ミル 3 見る・読む・わかる日本の歴史3 朝日新聞社 ¥2,000
- 407 ウノ 理系の女の生き方ガイド (ブルーボックス 1307) 講談社 ¥860
- 410.9 ナカ 無限の不思議 (ブルーボックス) 講談社 ¥740
- 495.08 セイ 2 性の絵本2 大月書店 ¥1,300
- 701.1 ササキ タイトルの魔力 (中公新書 1613) 中央公論新社 ¥820
- 702 タカシ 芸術のパトロンたち (岩波新書新赤版 490) 岩波書店 ¥660
- 740.2 ハシヤ 写真の歴史 (「知の再発見」双書 109) 創元社 ¥1,400
- 763.08 オノカ 39 リストピアノ曲集 III (新編世界大音楽全集器楽編 39) 音楽之友社 ¥2,800
- 913.6 オツイ 暗黒童話 集英社 ¥905
- 913.6 クラモ いつもポケットにショパン 1 (集英社文庫) ¥563
- RP813.7 ケンタ 3/2001 日本国憲法 (現代用語の基礎知識 別冊付録 2001 年度版) 自由国民社 ¥0
- 2005 年度紛失分 6 冊 ¥6,910
- 316.81: ハラシ 在日」としてのコリアン (講談社現代新書 1410) 講談社 ¥640
- 372.53: ハナタ アメリカ小・中・高校教育マニュアル 日本経済新聞社 ¥3,200
- 361.8: ミスタ ナウなヤング (岩波ジュニア新書) 岩波書店 ¥600
- 913.6: ヤマナ ぼくがぼくであること (岩波少年文庫) 岩波書店 ¥720
- 914.6: ヤナセ もうひとつのアンパンマン物語 PHP研究所 ¥1,200
- 923.5: ラ:1 三国志 上 (岩波少年文庫) 岩波書店 ¥550
- 2004 年度不明分 14 冊 (不明分 32 冊中 18 冊発見しました) ¥24,154
- 209: セカイ:1 世界の歴史 1 中央公論社 ¥2,524
- 242.03: シヨ 大英博物館古代エジプト百科事典 原書房 ¥9,500
- 491.35: シュフ 顔よりからだ。(主婦と生活シリーズ 133) 主婦と生活社 ¥1,300
- 491.371: イクタ 脳の健康 (ブルーボックス B-1360) 講談社 ¥860
- 523.06: ライス 絵で見る近代建築とデザインの歩み 鹿島出版社 ¥2,600
- 911.56: タカム 高村光太郎詩集 (岩波文庫) 岩波書店 ¥250
- 913.6: カワハ 海の火祭 毎日新聞社 ¥1,500
- 913.6: ハシモ S&Gグレイテスト・ヒット+1 (ちくま文庫) 筑摩書房 ¥690
- 913.6: ミウラ 塩狩峠 新潮社 ¥1,300
- 933: スウ アンクル・トムの小屋 (世界文学の玉手箱 11) 河出書房新社 ¥1,000
- 933: ルイス:7 さいごの戦い (岩波少年文庫) 岩波書店 ¥550
- 983: トスト:1 罪と罰 上巻 (新潮文庫) 新潮社 ¥590
- 983: トスト:2 罪と罰 下巻 (新潮文庫) 新潮社 ¥590
- 984: トルス 人生論 (ワイド版岩波文庫) 岩波書店 ¥900
- 2004 年度紛失分 8 冊 ¥12,412 (紛失分 11 冊中 3 冊発見しました)
- 145.8: サカイ 分析・多重人格のすべて リヨン社 ¥1,456
- 213.6: マツモ 東京の歴史 (岩波ジュニア新書) 岩波書店 ¥650
- 407: タキカ:2 ガリレオ工房の身近な道具で大実験 第2集 大月書店 ¥1,300
- 519.8: ヤサシ:6 海はなぜよごれてしまうのか? (やさしい図解・地球があぶない5) 偕成社 ¥3,000
- 818: カワサ 方言の原っぱ 草土文化 ¥980
- 913.6: ムコウ 思い出ランプ (新潮文庫) 新潮社 ¥320
- 913.6: ムラカ 限りなく透明に近いブルー (講談社文庫) 講談社 ¥260
- E933: ホ モルグ街の怪事件 (フォア文庫 B148) 岩崎書店 ¥550
- 2003 年度不明分 5 冊 ¥4,444 (不明分 7 冊中 2 冊発見しました)
- 493.7: カサハ 精神病 (岩波新書 新赤版 581) 岩波書店 ¥640
- 558.7: タカハ 海にねむる資源・海洋深層水 ¥1,400
- 913.6: ナツメ こころ (新潮文庫な-1-13) 新潮社 ¥324
- E913.6: ナカカ こぎつねコンチ (こどもとお母さんのおはなし) のら書店 ¥1,100
- E913.6: ヤタマ あしたぶたの日ぶたじかん (あたらしい創作童話) 岩崎書店 ¥980
- 2003 年度紛失分 9 冊 ¥8,450
- 1 ケルト神話と中世騎士物語 (中公新書 1254) 中央公論新社 ¥740
- 410.38: カタヤ 数学公式に強くなる (岩波ジュニア新書) 岩波書店 ¥670
- 675.08: ハコハ:20 いらっしやいませスーパーへ (社会科はこぼれてくるしくみシリーズ'20) PHP 研究所 ¥2100
- 830.7: コハヤ インターネット英語入門 (岩波ジュニア新書 354) 岩波書店 ¥700
- 913.6: サイト ガンバとカワウソウの冒険 (岩波少年文庫) 岩波書店 ¥800
- 913.6: タサイ 斜陽 (新潮文庫) 新潮社 ¥200
- 916: イノウ 生きています、15歳。 ポプラ社 ¥1,200
- E388.8: クニマ:4 顔のことわざ探偵団 (フォア文庫 B204) 童心社 ¥540
- E933: モンス ミイラ男 (モンスター図鑑) ほるぷ出版 ¥1,500



APAC Music-Band

Music In Our School

Paul Lindley

Music

I never cease to be amazed at the level of commitment and talent that is evident among the music students at OIS/SIS. This is evidenced by the high level of participation and outstanding concerts that are given by students in all performance ensembles.

Recently I had the opportunity to accompany sixteen of our top wind and percussion players as they traveled to Seoul, Korea to participate in the annual Asian Pacific Activity Conference Band Festival held at Seoul Foreign School. In this festival, top music students from all six of the APAC schools join together in what always turns out to be a wonderful experience for all involved. This year was certainly no exception with outstanding works being performed by the group.

Dr. John Lynch from the University of Kansas endeared himself to the Asian community and quickly won over the hearts of the students in order to put together a memorable performance. Dr. Lynch often commented on the high quality of the student performers and even volunteered to come back in the future as a guest conductor. True to form, the students from OIS/SIS stood out as exceptional musicians and young adults in every way and made a lasting impression on Dr. Lynch. He spoke very highly of their talents and attentive manner during rehearsals and was literally “blown” away by their superior level of musicianship.

The finale concert, performed in the Lyso Center for Performing Arts, was well attended and truly outstanding. Many students from OIS/SIS took on leadership roles and played solo parts in the performance. As one of the directors in the audience, I was highly moved by their performance.

Congratulations go out to the following students not only for their selection into this honor group, but for their outstanding contributions to the OIS/SIS Music Program:

Mai Iida (flute)
 Yaya Makino (clarinet)
 Yuko Inoue (clarinet)
 Midori Hase (clarinet)
 Yu Asada (bass clarinet)
 Raymond Terhune (alto saxophone)
 Yuka Matsubara (tenor saxophone)
 Yuki Nobuhara (baritone saxophone)
 Akira Moriguchi (trumpet)



Natsuko Itami (trumpet)
 Akiko Matsumoto (trumpet)
 Akiko Fukai (horn)
 Yukiko Kubo (horn)
 Mari Tsugawa (trombone)
 Wataru Kameyama (tuba)
 Reina Shishikura (percussion)

In closing, I commend the parents, staff and administration for supporting these students in all of their many endeavors both inside and outside the classroom. Kudos to all of the musicians in the music department. Please mark your calendar to hear future student performances.

- May 11th – Spring Music Recital at 4:00 in the School Theater
- June 13th - High School Spring Concert at 6:30 in Mino City Maple Hall
- June 22nd – Band School Spring Concert at 4:00 in the School Theater
- June 23rd – Orchestra and Choral Spring Concert at 4:00 in the School Theater

We hope to see you there!

★ APAC とは

Asia Pacific Activities Conference の略称で、次の学校が加盟しています。

< APAC 参加校 >

北京インターナショナル・スクール (ISB: 中国)、上海アメリカン・スクール (SAS: 中国)、ブレント・インターナショナル・スクール・マニラ (Brent: フィリピン)、ソウル・フォーリン・スクール (SFS: 韓国)、カナディアン・アカデミー (CA: 神戸)、千里国際学園 (SIS/OIS: 大阪)

APAC Theatre

Kelly Welch

Library

Eight SIS and OIS high school students traveled to Beijing in February to attend the annual APAC Theatre Festival. More than 60 students from Shanghai American School, Seoul Foreign School, Brent International School, Canadian Academy and the International School of Beijing took part in the event. Each school prepared a short original piece to share with the group, and then took part



in workshops built around the concept of physical theatre. Working in groups mixed by school, our students studied mime, worked with Chinese props, tackled juggling, engaged in stage combat, and were introduced to wushu—martial arts for performance—by a black belt master. Each mixed group created an original piece based upon their workshop experiences to perform on the final evening of the Festival. This was the first year that we were able to participate fully in the Festival, and Osaka students made a very favorable impression all around. We look forward to next year when APAC schools come to Osaka for the 2007 Theatre Festival.



4名が入賞

吹田市長杯陸上競技大会

馬場博史

トライアスロンクラブ・ランニングクラブコーチ、数学科

吹田市長杯陸上競技大会が4月16日(日)に吹田市総合運動場で開催され、本学園から生徒14名が参加し、4名が6種目で入賞しました。

<入賞者>

小学5年男子 100m 5位 Samuel Junqua (OIS4)、高校男子 1500m 1位 5000m 1位 永田悠太 (SIS12)、1500m 2位 5000m 2位 (SIS10) 小澤悠、5000m 3位 Raymond Terhune (OIS10)

<他の参加者>

Jonathan Junqua (OIS6)、Kento Baba (OIS7)、竹尾麻子、柴田美奈、阪上夏希、三木氣吹、阪上孟志、池田憲治(以上 SIS8)、高橋直人(SIS9)、春名暢(SIS10)

前号の摂津市民マラソン完走者名「小懸郁」「池田憲二」は、正しくは「小懸郁」「池田憲治」でした。お詫びして訂正いたします。

4種目で優勝

関西アクアティック水泳大会

東 千歳

スイミングクラブコーチ、保健体育科

3月12日(日) 葉業鳴尾浜スポーツセンターで関西アクアティック水泳大会が開催され本学園から3名が参加しました。

<結果>

相山朋加 (SIS12)

25m自由形優勝 16秒80

25mバタフライ優勝 18秒69

中島徳市 (SIS11)

50mバタフライ優勝 28秒45

100m自由形優勝 57秒24

Raymond Terhune (OIS10)

50m平泳 3位 46秒50

OIS school exchange program in Bali

Lyn Melville-Rea

OIS ESL, Humanities, CAS

Most international schools have mission statements similar to ours: Caring, creative, informed individuals contributing to the global community. Such high ideals sound good on a web site or look pretty on the cover of a school prospectus - but how do we make them a reality when most of us at international schools lead such affluent lives? In this case, understanding what it means to contribute to the global community began with developing friendships between our OIS students and the students of SMK Payangan, a rural high school in Bali, Indonesia.

From March 15 – 22, eight students, seven teachers from OIS and nine others (mostly family members) made their first visit to SMK Payangan high school – all at their own expense. In the mornings, we taught English, Japanese and basic computer skills to 160 students. We were served lunches prepared and served by the SMK students as part of their hospitality training. In the afternoons, SMK Payangan students and teachers taught drawing, dance, Indonesian and how to make temple offerings from palm leaves and flowers. Between classes, we played basketball and badminton together, ate snacks from the canteen, laughed and chatted.

As the students were of similar ages (between 15 and 18) it was easy for them to form friendships and gain insight into each other's personal lives, values and cultures. Both groups worked collaboratively and exchanged valuable skills. OIS students and teachers were able to finance the exchange, while SMK Payangan students shared their rich culture. On the last night, SMK Payangan School hosted a farewell dinner. Our art



work was displayed and we all made a short speech in Indonesian. The school principal from SMK Payangan made an excellent speech, despite his limited English. Some OIS students performed two hip hop dances and 8 girls from SMK Payangan treated us to two Balinese dances in full costume. It was a truly memorable and touching experience. Many tears were shed and countless promises made to keep in touch.

Garuda Airlines kindly agreed to subsidize our group's airfares because our visit included student exchange and volunteer work. We stayed at Alam Sari, a small resort north of Ubud which practices environmental responsibility through its solar heating, waste-water treatment plant, recycling and employment of staff from the local village. Apart from some traffic noise, Alam Sari has a friendly, somewhat exotic, tropical ambience with an open restaurant, pool, and delightful gardens. <http://www.alamsari.com>

OIS administrators were somewhat hesitant to approve a school trip to

Bali, a region in which some western countries have placed travel advisories. (The Japanese government rates Bali as a 1, on a scale of 1- 4, with 4 being the most dangerous) Before approval was given, students and parents had to sign an agreement waiving any liability against the school if any misfortune occurred. All students had to have travel insurance. Fortunately, because of Bali's large expatriate and tourist numbers, modern, western medical facilities are available. As a further precautionary measure, we stayed away from places frequented by large numbers of western tourists. Fortunately, from the moment we arrived, the Balinese were so warm and friendly that any apprehension members had was soon dispelled. We also felt our presence positively supported the local people who have been severely affected by the tourism downturn.

We endeavored to show our students how to be responsible, aware and eco friendly. This is particularly necessary for the long-term sustainability of the tourism industry in Bali. Therefore, on the first morning after

our arrival, Dewa, an expert on Balinese Hinduism and local culture, met us at our hotel and lead us on a traditional village life tour. Dewa explained everything from how each village carefully shares its water supply to the negative impact of introducing pesticides into the rice fields. He explained to us how families share space in their homes and many intricate details of their daily lives, including burial customs. Students were challenged to consider the environmental impact of their own visit. On average, tourists use ten times more water than locals and, because of this, water shortages are expected in Bali within the next decade. Excessive water use is particularly evident in the luxury hotels. Shockingly, five star hotels use 1,500 – 4,000 liters of water per room per day compared with 80 liters per person per day in most Balinese households.

Our group was further enlightened by guest speakers from Mitra Bali Fair Trade www.mitrabali.com. The speakers gave an evening presentation about child labor, corruption in Indonesia and ways we may help to alleviate poverty. Many souvenirs were purchased through their fair trade store in Ubud.

On another day, Rucina Ballinger, an American married to a Balinese and founder of YKIP (Humanitarian Foundation for Mother Earth) gave an informative breakfast presenta-



tion. She talked about the need to eradicate poverty through education. She is a founding member of the Kembali project. Through this NGO you can sponsor a child's education. US \$150 dollars a year will cover expenses for a child's primary school education and an annual donation of US \$220 dollars will cover expenses for a junior high school student www.ykip.org/kembali.asp. Rucina challenged us by saying, 'Social consciousness is not a choice, but a necessity.'

The students were also physically challenged – climbing Mt. Batur, an active volcano, with the local guides and white water rafting down the famous Ayung River with Sobek, a company which encourages environmental responsibility right down to using palm leaves for cups and plates.

OIS students and teachers who joined this trip are now considering ways to support their new friends in Payangan. They are planning fund-raising activities for specific projects such as increasing SMK Payangan's power supply, getting an internet connection or sponsoring financially-struggling students through high school. SMK Payangan is a private, non-profit high school seeking to offer education at less cost than Indonesian public schools. School fees at SMK Payangan are about US \$6 dollars a month. Full-time teachers' salaries average about US \$70 a month, but the school depends mainly on part-time teachers. While school fees of US \$6 a month may seem unbelievably



cheap to us, more than half of Bali's rural teenagers cannot afford to continue their education past junior high school. With only minimal education, these students cannot escape their poverty.

Now that we are back in Japan, we look at our own school facilities with more appreciation and with increased awareness of our responsibility to help those who are financially less fortunate than ourselves. Our Payangan Education Project (PEP) is in its infancy, but we're all very excited to know that 100% of our fund-raising will go directly to our new friends in Payangan.



保護者会だより

●「保護者会だより」文責：保護者会 Public Relations Committee
ホームページアドレス <http://www.sispa.jp>

保護者会活動報告・予定

保護者会の活動を次の通り報告いたします。

■ Board

・第10回定例会

3月2日（木）10:30～ 保護者会室
学校から下村事務長のお話と各委員会からの活動報告。

・臨時総会

3月2日（木）13:30～ 3F会議室
議案は承認され、インターナショナルフェア2004年度繰越金と2005年度の利息との合計663,783円を千里国際学園(SIS)に寄付することが満場一致で可決されました。

・英語科の先生方との茶話会

3月7日（火）14:00～ 3F会議室
普段疑問に思っていたことなど英語科の先生全員から、保護者からの質問に答えられました。

・委員決めのお会

3月13日（月）10:00～ 3F会議室
各委員会より委員会活動の要点が説明され、次年度の委員にどの委員会に所属するかを考えていただきました。

■ Hospitality Committee

HP掲載用の写真整理と原稿作成。4月11日 Hospitality Committee お疲れ様会（京都）

■ Network Committee

次年度への引継ぎ資料整理、作成。1年間に配布した手紙、名簿をCDに焼き付ける作業。

■ Public Relations Committee

3月インターカルチャ104号、5月105号発行。期間を通して、インターカルチャ編集・校正作業。ホームページ運営。



S I S保護者会1年をふり返って

5月24日の保護者会総会を持ちまして、2005年度委員会活動は終了いたします。皆様1年間、委員会活動へのご協力ご参加ありがとうございました。各委員長・委員の皆様へ、1年間の活動をふり返ってのメッセージをいただきました。

★Board

1年を終えて「リマインド」

2005年度保護者会会長 津高かおる

《学園創立の目的》 The Foundation Purpose

I. 二つの学校は一体である。Two Schools Together

II. 考え方の交流。Exchange of Ideas

III. 文化の理解。Understanding of Cultures

これは、委員のお仕事をしているときに、校長先生からいただいた創立当時の資料に記してあったものです。“Two Schools Together” は、2005年度 International Fair の標語となった言葉です。

保護者会の月例ミーティングでは、校長先生のお話をお聞きする機会があります。先生から、年度初めに「創立15周年のこの機会に“リマインド”という作業をしましょう」とお話をいただきました。生徒たちに、時折「あれ？そういうことだったかな？」と初心を問う事によって、生徒たちも自らの気持ちを思い出すものだということから、我々大人たちもこの15周年という機会に、創立当時のことをリマインドしてみましようというお話になりました。

先生方も生徒たちも親たちもみんなで学校を創ろうと、熱い空気が立ちこめていた頃とは違い、今は成熟と安定の時を迎えたのかもしれませんが、しかし、教育理念に共感して SIS に子供を通わせている保護者として、学園の発展に役に立てると思うことはまだあると感じます。保護者会において、創立15周年という機会に校長先生からいただいた“リマインド”という言葉は、大いに役立ちました。

学園創立の目的に掲げられている“Two Schools Together” が、

International Fair の標語となったものの、すべてが“Together”ではないことに気づき、話し合いを重ねたことがありました。その中で、「六ヶ国協議はどうやって結論を導いたのだろうか？」と真剣に異文化理解の難しさを語り合ったこともあります。でも、時間をかけて話し合ううちに折衷案を導いたり、お互いに譲歩したりと、自然にお互いが納得する結論に達する事ができました。ちょうどそんな頃、社会科の野島先生から、12年生が教材として使っているという資料をいただきました。『『平和を創る発想術』ヨハン・ガルトゥング著』、その中には、異文化理解・紛争を避けるためのキーワードがいくつか書かれていて、それを読んだとき「私たちがしてきたことやん！」と思うとともに、まさにそのことが「子供たちがこの学校で日々体験を通して学んでいるもの！」と、この学校の良さについても皆でたくさんお話をしました。結論を導いたことと同時に、子供たちと同じ勉強ができたことに、そして“Two Schools Together”をリマインドできたことに、とても喜びを感じています。

保護者会活動の中でも、家庭でも、人生においても、忘れてしまいがちなことを時折思い出すことで、心がほっとしたり、奮起したり・・・そういう大切なことを“リマインド”させてくれたこの言葉に、感謝の気持ちでいっぱいです。皆さんも、積極的に保護者会活動に関わって、SISならではの素晴らしい体験をされることをお勧めいたします。

一年間の任期をまっとうできました事はひとえに皆様のご支援、ご厚情のおかげと感謝いたしております。ありがとうございました。

----- SIS保護者会 1年をふり返って -----

★ International Fair Committee

(インターナショナルフェアで企画担当をしてくださった方から数名お声を頂戴しました。)

2005年度の活動を終えての『寄せ書き』

◎フェア委員長になったことで、私は一生の宝物になるような素晴らしい経験をしました。色々な国の人が集い参加するお祭りを OIS 保護者と共に作っていくという作業を通して、大きく成長したような気がしています。入学したばかりの頃、自分の子供はこの学校に通うだけで、自然に OIS 生徒と関わりながら異文化体験をするの难道うかななどと、勝手な期待をしていました。しかし実際は、「OIS 生徒との付き合い方が分からないから・・・」「考え方が違うから・・・」というようなことを言い、あまり関わろうとはしてきませんでした。また、私自身も子供の気持ちをうまく捉えられないで、具体的なアドバイスができずにおりました。ところが、フェア委員会活動をやっていく内に、遅ればせながらだんだんとその時の子供の置かれていた状況や言葉の意味をはっきりと見えてきたのです。そして・・・「違う文化を持つ人との関係って、我慢するのではなく、諦めるのではなく、見出すものじゃないかな？うまい付き合い方が見つからなかったら、お互いであみ出せば？」・・・親として言う言葉はこんなにも簡単だったのだと分かったのです。残念ながら子供は3月に卒業してしまい、この台詞は次、いつ使えるかわかりません。でも、今度は自信を持って適切なアドバイスができるように思えます。日本でしか暮らしたことのない私にとって、OIS 保護者との関わりは新しい発見や驚きだらけでした。これは、私と子供との共通の体験です。子供と同じ体験のできる学園保護者会に対し感謝をすると共に、保護者の皆様には保護者会活動に参加することを是非お勧めしたいと思っています。特に、両校の関係の在り方を模索する努力を子供達に見せられるフェア委員会は多くの保護者が経験していただきたいと思えます。そして、保護者が子ども達の指針になるという理想を現実化していってもら

えればと思います。

(深田至保 インターナショナルフェア委員 SIS 委員長)

◎(前略) The OIS PTA and SIS PA therefore have enormous capacity to complement each other, creating a productive team capable of running a wide variety of events and activities. The result of the 2005 International Fair shows what can be achieved when the two parent bodies work in synergy, utilize each other's strengths, and bring out the very best qualities from both schools. (後略) 《インターカルチャ No.104 シリーズ「学校を取り巻く人たち」より抜粋》 (Prudence Kellett International Fair Committee OIS Head & OIS PTA President)

OISPTA と SISPA にはしたがってお互いに補完し合える土壌があり、協働のチームを組織して広範囲の様々な行事や活動を行うことができます。2005年のインターナショナルフェアの結果が、2つの父母組織が協力し合うことにより2つの学校の特色を最大限に引き出すことをできることをまさに示しています。(日本語訳 獅子倉雅子 OISPTA Japanese Language Secretary)

◎フェア委員会に出席する度に、私たち7年も少しずつ学校のことを知ることができました。フェアの意義を徹底的に検討し、それを形にする難しさ、しかしそれを楽しみながらプラスのパワーでどんどん具体化されていくのを目の当たりにでき、本当に良い経験をさせていただきました。素晴らしい方々と出会えて感謝です!

(後藤裕子 フェア委員 エコ担当)

◎気持ちがひとつになった1日を体感できて、超ラッキー!ハハハ (大路美文 フェア委員 15周年記念パーカー担当)

◎私は入学の年にフェア委員になり、しかもブース担当ということで校内のコンセ

ントの数と場所、アンペア数を知ることができたことを幸運に思います。HFL内の鍋やザルの在りかもわかるなんてすごい!フェア当日のHFLはとっても和気藹々、OIS/SIS、学年の垣根を超えた交流が盛んで(つまり試食しあいっこ)、私はその場にいられることが心地よくて心地よくて(おなかも満腹)フェアが終わるのが惜しいくらいでした。たくさんの人に助けていただいたこと感謝しています。SIS生活のとってもいいスタートがきれました!これからとっても楽しみです。(境目美佳 フェア委員 ブース担当)

◎両校の保護者が自分のやれることを気持ちよくやるが一番大切だと思います。そのような親の姿を見せることで、子どもたちにより影響をあたえ、結果的に学校に寄付もできる、というのがインターナショナルフェアの意義だと思います。方向がおかしくなりそうになったら、原点にかえりましょう、ね。

(深井美貴子 ホスピタリティー委員会副委員長 寄贈品コーナー担当)

◎難しい事の苦手な私は自分のできることから参加しました。共に創る喜びを実感しました。皆様ありがとうございました。(岩村 葵 15周年記念パーカー担当)

◎出逢いで愛=一緒に積み上げて往く素晴らしさを共有出来た幸せに感謝!(谷 千津子 フェア委員 会計)

◎フェア委員会ではエコチームを担当しました。まったくゼロからの立ち上げでどうなることかと思いましたが、フェア委員会のメンバー、ボランティアの方々、保護者のみなさま、そして当日フェアにこられたかた、みんなの思いと協力で形になったことは本当に大きな喜びでした。入学当時まったく学校に知り合いはいなかったのですが、フェア委員になったことで、チームワークで達成感を共有できたくさんの方にも恵まれました。また活動を通じて学校とより深くかかわれたことにはとても感謝しています。(寺田 世津子 フェア委員 エコ担当)

----- SIS保護者会 1年をふり返って -----

◎学園設立当時のレターより 学園設立の目的 (The Foundation Purpose)

1. 二つの学校は一体である (Two Schools Together) 2. 考え方の交流 (Exchange of Ideas) 3. 文化の理解 (Understanding of Cultures) ……ちょっと頑張ったらこんな素晴らしい体験できちゃいました!!
(津高かおる SISPA 会長)

◎ SIS/OIS は小さな地球。沢山の文化があり、沢山の歴史があり、沢山の考え方があり。この小さな地球で子供たちは共に学び共に遊び共に成長している。私たち親も共に語り笑い学び、共に小さな地球を支えたい。

(梁井利恵子 インターナショナルフェア 副委員長)

◎感想 「皆さんへの感謝！」の一言に尽きます。そして当日はもちろんですが、準備の期間もホントに楽しかったですし、面白かったです。学校中のどの教室よりも、PA 室からの笑い声がうるさかったんじゃないかな?と、少々心配になりましたが、皆さんそれぞれ (私自身もそうですが…) お仕事を持っている方、家庭の事情を抱える方、小さなお子さんがいらっしやる方…等、それぞれが時間の制約のある方でした。それでも、お互いが自分の事情の許す範囲で、費やせるエネルギーと時間を注いだ結果、ホントにすばらしい一つの事を達成できたんだと感じています。誰一人欠けても、今回のフェアを成功させる事はできませんでした。本当にありがとうございました。
(宮地美歩 駐車場担当)



★ Hospitality Committee

Hospitality Committee では、春季・冬季コンサート、ASP でのティーサービス、スポーツ招待試合や APAC でのランチやパーティのサービスをお手伝いしました。去年はなんと 21 名のメンバーだったのですが、全員出席は難しく、いつも半数ほどで、あとはボランティアの方々の手をお借りすることになりました。最後まで手探り状態の私達でしたが、パーカー先生、大迫奈佳江先生、志垣先生ほか先生方、前年度の委員さん、お手伝いをしてくださったボランティアの皆さん、スポーツボランティアの生徒さん達のおかげで気持ちよくお仕事ができました。その上、「ありがとう」、「おいしかった」と嬉しい言葉と笑顔をいただき、本当に素敵な楽しい一年でした。去年は OIS の保護者の方もお手伝いを申し出て下さり、OIS と SIS 合同のサービスも出来ました。おまけに、おいしいお料理を教えてもらい、お味見までさせていただきました。お話しすると、こんな近くにいる 2 つの学校なのに知らないことも多いのにお互い驚きました。これからもこのようにして交流が続くことを期待しています。どの委員会活動も同じだと思うのですが、最初は少し大変でも徐々に楽しくなり、「一年終わってしまって寂しいわ」というくらいの素敵な関係が築けると思います。ぜひ、皆さんにも一度お試しください。Hospitality Committee 一同、ホスピタリティの気持ちを忘れず、楽しくサービスをさせていただきます。最後になりましたが、ご協力いただいたたくさんの皆さんにお礼を申し上げます。
(委員長 真砂智子)



★ Network Committee

個人情報保護法施行一年目。名簿の取扱いについては個人のモラルが改めて問われる大切な年だったと思います。過剰な萎縮のないよう、有効性に配慮しつつ、活動してきました。その事についてまたその他いろいろな事を勉強できた一年だったと思います。仕事を持っている者としては限られた時間の中での活動しか出来ませんでしたが、それぞれが都合をやりくりし、時間を作り、活動しました。なかなか細部にまで行き届きませんでしたが、多くの方々のご理解のもとで成り立ったのだと実感、感謝です。保護者会活動において、定例会などで委員会の枠を超えて話し合ったとき、フェアで多くの方と触れ合ったとき、感じる事、楽しむ事、喜ぶ事、そして前を見つめる気持ちは、誰もが自由に抱く事ができるのだと、しみじみ感じました。あつという間の一年、メンバーにも恵まれ、またたくさんの方との出会いがありました。今振り返ればどれもこれもやはり意味のある出会いだったと思えるのです。貴重な経験をさせて頂きました。最後になりましたが地域親睦会が個人のネットワークを広げる手段として、今後も引き続き有効に活用される事を願っています。一年間ありがとうございました。

(委員長 半田有美子)



★ Public Relations Committee

インターカルチャーの「保護者会だより」の作成、保護者会ホームページの更新、メールマガジンの配信が主な活動でした。「保護者会だより」では、特集として、「学校 (SIS) を取り巻く人たち」というテーマで、先生、第二外国語や音楽個人レッスン、SIS の英語教育、保護者や卒業生を取り上げました。先生方の素顔、学校の知ってるようで知らないシステム、英語科オフィスの様子、保護者や卒業生の活動など、お伝えできたと思

OIS PTA よりの投稿記事

OIS PTA Fund Raising について

千里国際学園の同じ敷地の中にある SIS と OIS ですが、たとえば、親の組織も SIS は PA (保護者会)、OIS は PTA というように、システムが異なることがいろいろあります。まず“違いがある”と知ることによって、お互いを理解し、もっといい関係が築けるのではないのでしょうか。「SIS の保護者の皆さんに OIS PTA についてぜひ知って欲しい」と OIS PTA 会長からメッセージを頂きました。さらに両校保護者の親睦を深めるために、ぜひお読みください。(注: Fund Raising = 資金集めの意)

Why do we need fund raising events (and volunteer help) and how does the OIS PTA use these funds?

In line with our PTA By-Laws, OIS PTA funds are raised in order to “advance the education of the students at the school by providing funding and assisting in special projects for education at the school not normally provided through the school budget.”

All activities arranged and managed by the PTA have a fund raising objective and / or an objective to foster exchange and communication between parents and teachers of both schools.

Unlike SIS which utilizes a system whereby all parents pay a compulsory PA (Parent Association) fee of ¥10,000 per year, the OIS PTA (Parent Teacher Association) relies on fund raising activities.

Until last year, the OIS PTA relied heavily upon International Fair revenue for funds. This was a sum of money agreed to by former OIS PTA and SIS PA committees - both the OIS PTA and SIS PA received an equal amount of ¥700,000 each.

Last year a joint decision was made by the Heads of both schools, in collaboration with the Joint International Fair Committee, to channel all fair proceeds towards a specific project that would be of mutual benefit to students of both OIS and SIS. This

approach replaced the previous system of dividing fair revenue between the two schools. This decision was made in order to motivate all parents from both schools to participate and contribute. Last year’s fair resulted in a heightened spirit of goodwill and a strengthening of relations between our two schools. Fair revenue is being used to repair and purchase instruments for the music department and to purchase a trophy cabinet for the PE department.

Without International Fair revenue, the OIS PTA needs to carry out regular fund raising activities in order to raise funds required for its activities and special school projects. It is critical for the success of these activities that parents and teachers volunteer their time when requested.

Since January this year we have used ¥230,735 from accumulated PTA funds for the following:

- APAC Choir Uniforms;
- Entertainer at Pot Luck Lunch;
- Freedom from Chemical Dependency (FCD) Group Student Seminars to educate students about the dangers of drug use;
- Visit by Head of Music from Seoul International School who was working as an artist in residence, conducting the orchestra and helping them prepare for APAC;
- Visiting Illustrator who gave presentations to elementary and middle school?? students.

The OIS PTA has already raised ¥160,222 since January this year through the following fundraising events - Korean Furniture sale, Korean cooking class, APAC bagel sale, and on-going bagel sales to teachers on a biweekly basis. Other planned fund raising activities for the new term include a wine tasting event at an Indian restaurant on April 15th (wine sales), sale of school sweatshirts, and sale of school t-shirts.

I look forward to the activities we have planned (and those we are still plan-

ning) for the remainder of the year and I trust the OIS PTA will be supported by the parents and teachers of both schools and everyone volunteers their time generously. Successful fund raising and activities ultimately benefit the school community and our students. (Prudence Kellett OIS PTA President)

(訳) OIS PTA において Fund Raising (ボランティアの募集も) がどのような理由で必要なのか、又 集められた Fund は OIS PTA でどのように使用するのか?

OIS PTA の Fund Raising は、PTA 規則に則り “通常の学校の予算ではカバーされない特別な Projects に対して資金援助することにより、生徒達の学習環境をさらに発展向上させること” を目的としています。PTA によって企画、運営される全ての行事には、Fund Raising を目的とする場合と、もしくは併せて両校の教職員と親の親睦を深めるものがあります。

SIS PA (Parent association) の活動が SIS の全保護者が納める年間 1 万円の会費によって運営されているのは異なり、OIS PTA (Parent Teacher Association) は Fund Raising 活動による資金に依存しています。一昨年までは、OIS PTA はインターナショナルフェアの収益金に全面的に依存していました。これは当時の OIS PTA と SIS PA の委員会によって合意されたもので、それぞれ一律に 70 万円ずつ受け取っていました。

昨年は、インターナショナルフェアの収益金を OIS・SIS 両校の生徒のためになる特別プロジェクトに一括して活用することを、両校の校長と両校合同で組織されたインターナショナルフェア委員会によって決定しました。一昨年までの収益金を OIS PTA と SIS PA 間で分配する方式に替わってこの新方式を導入することにより、両校のすべての親の積極的な参加と貢献が活発となることを期待しました。昨年のフェアでは両校の関係を深め、強い絆を結ぶことができました。昨年の収益金は音楽科の楽器の修繕と購入、そして PE 科のトロフィー展示キャビネットに充てられます。インターナショナルフェアからの OIS PTA への収益金がなくなったため、OIS PTA は、独自の行事と学校での特別なプロジェクトを援助するために、Fund Raising を随時行う必要があります。そしてこれらの行事を成功させるためには、親と教員のボラ

ンティア参加が必要不可欠なのです。

ちなみに今年度は1月より、以下の内容に230,735 円の資金が使われました。

- APAC コーラス ユニフォーム代
- ポットラックランチでのエンターテイメント代
- FCD グループの生徒によるドラッグの危険性についてのセミナー開催
- オーケストラの指導と APAC の準備の為に、ソウルインターナショナルスクールより音楽主任が訪問滞在
- エレメンタリーとミドルスクールの生徒のためにイラストレーターが訪問しプレゼンテーションを実施

OIS PTA は、今年度の1月より、コリアン家具の販売、コリアン料理クラス、APAC でのベーグル販売、定期的な教員向けのベーグル販売などで、すでに 160,222 円の収益を上げています。これから行われる Fund raising の行事としては、4月15日に行われる、インディアンレストランでのワインテイティング（ワインの販売）や学校ロゴ入りのパーカーやTシャツの販売が予定されています。

私は今年度の残り少ない行事を楽しみにしていますが、OIS PTA が両校の親と教員の積極的なボランティアの参加によって支援されることを期待してやみません。Fund Raising や行事の成功は、最終的には校内交流や私達の子供たちの為に役立っているのです。

(日本語訳：Masako Shishikura)



コリアン料理クラスの料理

ちよこつと情報 「インターカルチャ」について

お手元のインターカルチャ、どうやってできているかご存知でしょうか？2005 年度 PR コミッティでは、初めてインターカルチャの編集作業をやってみた関係で、色々わかったことがありました。ちよこつとだけここに紹介します。より身近に感じていただけたら幸いです。(そして、どんどん投稿記事をいただければもっと幸いです！)

◎インターカルチャは誰が編集してる？

これは、もう何と言っても数学科の馬場先生です。「先生」も大変なお仕事なのに、その上インターカルチャの編集作業を行っていらっしゃいます。(もつとと言えば、SIS のホームページの運用もされています！)

◎保護者会のページは誰が編集してる？

2004 年度までは、PR 委員が集めた原稿を馬場先生が編集してくださっていました。2005 年度は、はじめて PR 委員が自分でレイアウトし、馬場先生にお渡ししました。内容は、保護者会活動および、それぞれの委員から集めたものを掲載します。また、保護者からの投稿も「MIMI コーナー」というコラム記事として掲載しています。

◎インターカルチャ作成上の決まりとは？

1桁の数字、1文字のアルファベットは全角、そうでなければ英数は半角という決まりがあります。

また、印刷する関係上、インターカルチャ全体のページ数は4の倍数でなければなりません。集まった記事をまとめてみなければ全体のページ数が決まらず、毎回馬場先生が苦勞して4の倍数に合わせて下さいます。(これが一番大変だそうです。)

◎インターカルチャ発行回数は？

各学期ごとに2号が発行されます。つまり、1年間に6号発行されます。必ず掲載される内容は、各インターカルチャの最終ページに年間発行予定が載っています。年に6回発行するというのは結構忙しいものですから、いつも締め切りには追われている感じがします。(どうぞ、原稿を依頼された皆様は、必ず締め切りには完全な原稿を提出していただくよう、お願いいたします。)

いかがでしょうか？毎回何気なしにお手元に届くインターカルチャですが、ちょっと内部を知っていただくことで、身近に感じていただけたと思います。自分の子供たちの記事が掲載される喜びも大きいのですが、自分自身が書いた原稿が掲載されるのも嬉しいものです。どうぞ、身近な話題・子供のこと・趣味のことなど、何でもメールにて投稿してください。文字数やページ数に制限はありませんので、どうぞ宜しくお願いいたします。

投稿は pr@sispa.jp までメールにてお願いいたします。

*尚、掲載されるかどうか・掲載の時期については全体の編集の都合でご相談させていただきます。また、文字数やページ数の調整を行うことがあります。あらかじめご了承の上、投稿いただきますようお願いいたします。

2006 年度保護者会総会のお知らせ

2006 年保護者会総会を下記の通り、開催いたします。ぜひともご参加いただきますようお願いいたします。もしもご欠席の場合には、委任状の提出を宜しくお願いいたします。

日時：5月24日(水) 午後1時30分より 場所：シアター

5～6月行事予定

| 月 | 日 | 曜 | |
|---|----|---|------------|
| 5 | 11 | 木 | 春季リサイタル |
| | 17 | 水 | SIS 学校説明会 |
| | 24 | 水 | SIS 授業参観日 |
| | 27 | 土 | 学園祭 |
| 6 | 09 | 金 | 高等部スポーツ表彰式 |
| | 13 | 火 | 高等部春季コンサート |
| | 17 | 土 | SIS 学校説明会 |
| | 20 | 火 | SIS 編入選考 |
| | 22 | 木 | 中等部春季コンサート |

学園祭のお知らせ

2006年5月27日(土)
テーマ「和心(わごころ)」

周辺路上は駐車禁止となっております。学園の駐車場には限りがありますので、公共交通機関をご利用くださるようお願いいたします。

編集後記

新入生・編入生とご家族のみなさん、千里国際学園へようこそ。「配布されると教室が静まりかえる」インターカルチュアはいかがでしたか。そのうちあなたが掲載される日が来るかもしれません。できれば大切に保存しておいてください。SIS広報センターは、このSIS広報誌、学園ウェブサイト、教員の研究論文や授業実践報告をまとめた研究紀要の作成を主な仕事としています。凝ったレイアウトはできませんが、内容の充実を第一に考え、みなさんの知りたい情報をどんなに伝えていきたいと思っています。よろしくお祈りします。(馬場博史)

今年の春は、いつまでも寒い日が続きました。そのかわり、咲き始めた桜がいつまでもきれいで、長く楽しめました。新しい季節に、新しい仲間を迎え、新しい1年がはじまりました。私は今年度から、「SIS広報センター」の新メンバーとして、インターカルチュアの編集・発行、学園ホームページの作成・更新などを担当することになりました。今回は馬場先生に弟子入りしたばかりですので、ドキドキしながら、インターカルチュア作りに加わりました。これまでは、配られたインターカルチュアを読むのを楽しみにしていた立場でしたが、これからは、記事のための取材、編集、学園ホームページ作りに携わる楽しみも加わります。どうぞ皆さん、よろしくお祈りします。(合志智子)

インターカルチュアへの記事・ご感想等は、e-mailで hbaba@senri.ed.jp までお送り下さい。インターカルチュアはバックナンバーも含めて本学園ホームページ www.senri.ed.jp/interculture でもご覧いただけます。また広報センター担当の学園ホームページにつきましてのご意見・ご感想などもお待ちしております。

編集：SIS 広報センター 保護者会だより記事：保護者会広報委員 カット：イラストレーションクラブ生徒

Senri International School Foundation (SISF)

Senri International School (SIS)

Osaka International School (OIS)

4-4-16, Onohara-Nishi, Minoh-shi, Osaka 562-0032, JAPAN

TEL 072-727-5050 FAX 072-727-5055

学校法人千里国際学園 (SISF)

千里国際学園中等部・高等部 (SIS)

大阪インターナショナルスクール (OIS)

〒562-0032 大阪府箕面市小野原西4丁目4番16号

電話 072-727-5050 FAX 072-727-5055

年間発行予定と主な内容 () は発行時期

| | | |
|------------------------------------|----------|-----------------|
| 春学期 | 5月号(上旬) | 卒業式、入学式、大学等合格状況 |
| | 6月号(中旬) | 学園祭、教育実習 |
| 秋学期 | 10月号(上旬) | 夏の宿泊行事、夏の諸活動報告 |
| | 11月号(中旬) | 運動会、玄関コンサート |
| 冬学期 | 2月号(上旬) | オールスクールプロダクション |
| | 3月号(中旬) | 入試結果、卒業生へ贈る言葉 |
| 他に留学報告、スポーツ結果、各種表彰、授業紹介、生徒会・クラブ活動等 | | |

千里国際学園は、帰国生徒を中心に一般日本人生徒や日本の教育を希望する外国人生徒も受け入れて日本の普通教育を行う千里国際学園中等部・高等部 Senri International School (SIS) と、4歳から18歳までの主に外国人児童生徒を対象とする大阪インターナショナルスクール Osaka International School (OIS) とを、同一敷地・校舎内に併設しています。

両校は一部の授業や学校行事・クラブ活動・生徒会活動等を合同で行っています。チームスポーツはこの2校で1チームを編成しており、APAC(Asia Pacific Activities Conference)の公式試合や、近隣のインターナショナルスクール、日本の中学・高校との交流試合等に参加しています。このため、校内ではインターナショナルスクールの学校系統に合わせて、6年生～8年生(日本の小学6年生～中学3年生春学期)をミドルスクール(MS)、9年生～12年生(日本の中学3年生秋学期～高校3年生)をハイスクール(HS)と呼んでいます。